

## 第二章 中退減少対策に関する基本的調査

### 第1節 中退減少対策の基本的考え方

公共職業訓練における中退の原因は種々のパターンに類型されることは前章で明らかにしたが、このような中退をどのようにしたら減少させることが可能であろうか。本章ではこの問題にふれてみたい。

まず、中退減少対策をどのような考え方からアプローチするか、討議した。

前章で述べたごとく、中退の原因は個人的危機、個性的要因の不適合、素行不良、職業訓練の社会的評価などによっている。このような中退を減少させることは、現行職業訓練をどのように改善するかという問に等しいものである。つまり、職業訓練制度に内在する矛盾をみだし、同時に職業に関する後期中等教育の問題点、さらには、わが国の学歴偏向型の社会構造の欠陥とのかかわりの中で、職業訓練における中退減少が考えられなければならないであろう。この立場に立てば、抜本的に個人の職業的発達を最適に援助できるように、職業訓練を含む教育制度全般の改善を行なうことが必要であろう。

また一方、このような不安定な職業訓練状況下では、訓練生が不適応に陥りやすいから、それを予防するために現状の体制の中から訓練生の指導方向をみいだそうとする立場もある。現に、職業訓練担当者は在籍している訓練生に対して、許容される範囲で最大限の指導、援助を実践している。

そこで、われわれは職業訓練制度の改善を念頭において、現行制度のもとにおける指導改善を行なうことにした。

このような立場に立つとして、学科実技などの教科指導を改善することと、生活指導を改善することが必要な二つの方面である。例えば、知的素質の低い訓練生に対する実技指導のあり方を求めるのは、中退を減少することに結びつく。また、素行不良の原因を求め、それに対処することも中退減少になる。

ゆえに、教科指導と生活指導の両面から改善が行われるべきであろう。しかしながら、一プロジェクトチームが一時期に実践できることには限界があり、本研究においては、主にガイダンスおよびカウンセリング的視野、教科指導および生活指導の問題点を摘出し、中退減少の対策を考えることにした。

そして、その前提として、訓練生の声を聞き、訓練生を理解することから出発することにした。つまり、どのような個人的特性をもった訓練生かを知り、どのような生活意識で訓練校生活をして

いるかを知り、さらに、どんな事に興味・関心を持っているかを知ることにつとめた。

これらの基礎的な情報をもとにして、教科指導、生活指導、カウンセリングにおいて、訓練生の立場に立って、指導する方向を模索しようとするものである。

本研究においては、次のような調査を行った。

#### 1) 入校直後に個性調査を実施

個性調査としては、職業興味検査(藤原式)、職業適性検査(労働省編第二)、性格検査(矢田部ギルフォード)の三つを実施し、訓練生個人別に「個性プロフィール」を作成し、各科の担当者が持つようにした。(なお、昭和47、48年度には知能検査(田中B全)を実施している)

これによって、訓練生の知的素質、訓練職種に対する一般的職業興味の程度、性格特性を理解することができる。

#### 2) 在校訓練生の生活意識把握の方法吟味とその実態調査の実施

訓練生が中退意志を表明してから、指導しても指導の実行は薄い。そこで、在校訓練生がどのような意識で生活しているか、どのようなことに悩み、不安をもっているかを、訓練生個々に知る方法を工夫し、「訓練生個別ガイダンスインベントリー」を試案として、検討した。また、訓練生集団全体として、どのような生活意識にあるかを検討した。

#### 3) 仮設的ではあるが、カウンセリング室の設置

職員休憩室を転用して、訓練生のある種の悩み、不安解消のために、いつでもカウンセリングが実施できるような空間を準備した。(しかし、実際上の運用までには現在至っていない)

#### 4) 訓練生の一般的興味、関心に関する調査の実施

訓練生がどのような事象に関心、興味をもっているかを知り、職業訓練カリキュラムの全般的な改善点をみいだそうとした。

以上のような諸調査を実施し、その結果を職員全体で討議していく過程に、中退減少対策の方向性をみいだそうとした。

## 第2節 中退訓練生の特性と心理検査による予測との関連

### 1. はじめに

訓練初期に中退する可能性のある者を予測し、その訓練生に対する適切な指導をすれば、中退者は減少するであろう、という仮説は本研究の初期段階で重要な課題となっていた。

それで、戸田(1973)は、職業興味、性格、職業適性、知能等の心理検査を用いて、中退訓練生群と修了生群との personal traits を比較し、次のような差異が若干ではあるが認められると報告している。<sup>1)</sup>

- ㊶ 職業興味“機械的領域”において、中退訓練生群は修了生群より低い値をしめしている。
- ㊷ 性格検査において、中退訓練生群にはB型性格の者が若干多い。
- ㊸ 知能偏差値が高い者より低いの方が中退する比率がやや大きい。

しかし、このような心理検査を用いることによって、訓練初期に中退訓練生を予測することはできないと述べている。<sup>1)</sup>

この試みでは、中退群と修了生群との二分化が行われており、中退原因による類型との関連は検討されていない。つまり、訓練生の病気、あるいは家族の死による個人的危機での中退も含めており、これでは個性との関連が認められないのも当然である。

そこで、本節では、第一章で述べた中退パターン別に、personal traits との関連を吟味することを目的とする。

仮説としては、個性要因による中退は心理検査によって早期に発見し、予測できると考えている。

特に、職業興味は中退に関連すると思われる。Super(1957)は職業興味を教科の選択とその分野における継続に関連する因子ととらえ、“調査された興味は職業的発達と関係がある。なぜならば、人には自分の興味に対してはけ口を与えてくれるような仕事の分野があれば、そこに就職して長く続けるが、それが不適當な分野であれば、そこを離れてもっと適切な分野へ移ろうとする傾向があるからである。”“職業興味は努力の方向と持続性を決定する上で大いに重要であるが、努力の量を決定する上ではあまり重要ではない”<sup>14)</sup>と述べていることから、中退と職業興味との関連は強いと思われる。

そこで、中退群を細分した8類型における personal traits の比較、特に職業興味における比較を行うこととした。<sup>11)16)17)18)19)</sup>

## 2. 方 法

1) 昭和45年度全国総訓の中退訓練生の personal traits に関する資料を用いて、戸田の6群の中退分類にしたがって、各群間の personal traits の差異を再検討する。

訓練生の personal traits を把握する手段として、次の四つの心理検査をもちいた。

- ① 藤原式職業興味検査
- ② 矢田部ギルフォード性格検査
- ③ 田中B式知能検査
- ④ 労働省編職業適性検査である。

2) 昭和48年、昭和49年度の千葉総訓における中退訓練生の personal traits に関する資料を用いて、第一章第3節の8つの中退類型にしたがって、各類型間の personal traits の差異を再検討した。

心理検査は1)とほぼ同様であるが、知能検査は昭和49年には実施しなかった。

## 3. 結 果

### 3-1 戸田中退分類による各群間の personal traits の差異

中退理由の分類は、第I群<身体的な問題が主なる理由>群、第II群<個人的な問題が前面にだされている>群、第III群<家庭環境に主たる原因>群、第IV群<他の教育機関への進路変更>群、第V群<いわゆる社会的不適応>群、第VI群<中退理由がわからない>群である。

これにしたがって、各心理検査の性能について比較したのが表27である。

知能、職業適性検査の一般的知能について各群を比較すると、比較的知能偏差値が高いのが第V群、第IV群でSS50、ついでVI群のSS49、III群のSS48、I群SS47、最も低い群は第II群で知能偏差値SS45である。

このように、第IV群<進路変更>群、V群<いわゆる社会的不適応>群は知的素質は高く、逆に第II群<個人的な問題が前面にだされている群>は知的素質が低くなっている。

また、職業興味検査における職業訓練職種全般を意味する“機械的領域”(mechanical area)について各群を比較すると、第III群が25、第I群が24、第VI-24、第V群-23、第II群、第IV群が21となっており、家庭環境の原因、身体的理由による中退では職業興味の得点は高く、興味に関係なく中退が生じていることがわかる。

逆に、第II、IV群にみるように、<個人的な理由>、<他の教育機関への進路変更>は職業興味が訓練職種と一致しないことが原因の一端になっていることが実証された。

このようにみると、第II群は知的素質も職業興味の一致もないことが分かり、心理検査での中退予測の領域は、この種の個性要因による中退に可能性があるといえる。

### 3-2 8類型による各群間の personal traits の差異

千葉総訓における昭和48年、49年の中退をもとにして、次の8類型を示した。

つまり、<pattern 1>個人的危機(身体的要因)、<pattern 2>個人的危機(家庭的要因)、<pattern 3>個性要因(知的要因)、<pattern 4>個性要因(興味要因)、<pattern 5>素行不良、勧告退校、<pattern 6>進路選択の不確実性(入校直後の中退)、<pattern 7>他の教育機関への変更、<pattern 8>長期欠席、無断欠席(了解不能)である。

この類型にしたがって、各検査ごとの下位項目について比較したのが表29である。さらに、知的素質、職業興味の機械的領域について図示したのが図28、図30である。

職業興味についてみると、訓練職種に対する興味領域で、得点が低い訓練生が得点が高い訓練生より、中退率が高い。つまり、興味段階10 per—26.6%、20 per—26.3%、30 per—23.5%、40 per—27.2%と興味が一致していないと中退率が高い。逆に、80 per—14.8%、90 per—15.5%、99 per—16.6%と興味が訓練職種に一致していると中退率は低い。

この傾向を別の指標を用いて表現すれば、中退訓練生群では興味段階40 per以下が40.7%、70 per以上が39.2%で興味の得点が低い者が多い。それに対して、修了生群では興味段階40 per以下が28.1%、70 per以上が49.2%で興味得点が高い者が多い。

このように、職業興味検査で測定した訓練職種に関する“機械的領域”で、興味得点が低い者が中退する傾向が強い。

さらに、中退8類型についてみると、<pattern 4>個性要因(興味要因)では、すべての中退者が40 per以下となっており、中退時の中退理由をこの職業興味検査はうらづけている。換言すれば、中退時に“興味がない”とか、“他の職種につきたい”などの表現は、職業興味にもとづいていると言える。ゆえに、この類型の中退は職業興味検査でかなり予測することが可能である。

しかし、その他の類型では職業興味が高くても中退している場合もあり、確実な予測はできない。

つぎに、知的要因について職業適性検査の一般的能力(General intelligence)を用いて中退との関連をみよう。一般的能力は100を平均とする。60点台を含むそれ以下の段階では中退率が27.8%、70点台—20.2%、80点台—25.0%と知能段階が低いと中退も多い傾向にある。逆に、120点台以下でも17.2%と中退率が若干高い。その中間の段階では90点台—15.0%、100点台—14.2%、110点台—11.1%と中退率は比較的低くなっている。

中退群と修了生群とを比較すると、中退群では80点以下が68.9%で110点以上が11.2%であり、知能が低い者が多いのに対して、修了生群では80点以下が54.5%、110点以上が

表27 戸田中退分類群ごと個性性能の比較

	I DATA=12		II DATA=18		III DATA	
	AV.	SD.	AV.	SD.	AV.	
知能	C-01	12.917	1.382	12.389	2.189	13.444
	C-02	10.917	2.253	9.944	2.972	10.833
	C-03	11.667	1.491	10.611	3.147	11.444
	C-04	9.5000	1.5379	9.7222	1.9432	9.6333
	C-05	17.750	2.689	16.944	3.407	16.333
	C-06	29.667	5.467	27.722	6.261	28.444
	C-07	27.083	8.817	20.167	9.935	23.833
	C-08	11.750	1.090	10.778	2.878	11.278
	C-09	56.417	8.986	51.556	14.690	54.500
	C-10	20.833	2.703	19.000	4.269	21.333
	C-11	99.167	9.200	92.222	18.152	97.333
	C-12	46.750	15.144	45.333	10.599	48.278
職業性	T-G	96.167	18.284	85.389	29.566	94.778
	T-V	84.583	20.333	80.333	28.908	83.278
	T-N	94.500	16.034	79.167	28.340	93.556
	T-Q	98.333	15.612	94.500	25.513	100.722
	T-S	108.333	20.746	100.833	24.929	112.278
	T-P	113.917	19.734	97.222	24.319	107.944
	T-A	113.917	17.144	106.944	40.858	112.333
	T-T	100.750	9.773	89.500	28.006	110.333
	T-F	79.000	14.911	79.111	26.533	92.667
	T-M	89.250	23.131	81.333	25.887	91.833
職業興味	K-A	14.083	6.448	20.056	4.223	13.056
	K-B	22.917	6.751	19.611	5.946	22.667
	K-C	24.333	5.977	21.111	3.526	25.833
	K-D	17.750	6.084	20.944	4.390	19.053
	K-E	20.583	6.409	21.278	5.414	19.000
	K-F	20.833	4.793	17.722	4.344	20.722
	K-1	8.083	3.883	10.944	2.297	7.167
	K-2	9.000	2.677	9.444	2.362	10.111
	K-3	8.833	2.824	9.500	2.363	9.944
	K-L	58.583	9.665	61.167	7.275	57.833
性格	S-D	10.250	4.918	10.333	3.958	10.778
	S-C	10.250	3.982	10.167	4.298	10.556
	S-I	8.250	4.833	10.278	4.445	11.222
	S-N	8.417	5.346	7.889	3.665	9.944
	S-O	8.917	5.107	8.778	3.690	10.056
	S-CO	10.500	4.153	11.389	3.918	12.333
	S-AG	12.417	2.900	10.833	3.625	10.944
	S-G	11.833	3.738	8.667	4.203	8.611
	S-R	14.667	3.091	12.611	4.511	12.389
	S-T	11.833	4.506	10.222	4.637	11.500
	S-A	9.750	4.126	9.944	5.191	7.611
	S-S	12.167	4.450	10.444	5.408	10.111

= 1 8	IV DATA= 4		V DATA= 2 4		VI DATA= 2 4	
ASD.	AV.	S.D.	AV.	S.D.	AV.	S.D.
1.461	13.500	2.062	13.375	1.751	12.958	1.369
2.587	11.250	2.278	10.708	2.653	11.125	2.619
1.707	10.250	2.681	11.708	2.441	11.667	2.211
17.594	97.250	22.320	98.333	19.399	101.375	20.630
4.123	19.750	1.479	18.417	3.696	17.583	2.914
6.282	32.000	4.637	29.833	5.218	29.208	5.362
7.876	29.250	10.662	24.625	11.317	27.000	12.295
2.642	11.500	2.291	11.708	1.904	11.750	2.650
11.913	49.000	14.265	56.625	14.100	53.417	17.122
3.958	19.250	2.861	20.958	3.310	19.625	4.070
12.129	99.500	14.807	100.250	13.568	98.875	14.984
8.026	50.000	9.110	50.333	8.625	49.375	9.309
19.713	110.500	25.105	97.167	27.296	91.875	32.396
19.610	105.250	24.873	86.917	27.114	82.292	25.460
17.636	105.250	21.649	90.958	28.223	93.708	27.176
20.989	111.500	20.304	101.083	23.892	95.917	23.452
20.458	108.500	22.500	112.667	21.912	105.583	25.446
27.902	124.500	11.325	118.542	25.357	108.917	26.150
35.791	105.000	7.810	118.292	38.591	126.375	44.112
26.681	93.750	3.491	112.333	30.282	111.208	30.024
16.499	75.250	19.149	89.583	21.535	86.625	20.968
26.655	96.250	16.798	86.667	18.020	88.875	28.173
5.602	14.750	5.403	16.458	5.958	15.250	5.754
4.558	25.250	6.180	20.333	7.862	19.833	5.778
4.167	21.250	2.165	22.542	5.066	23.792	5.107
5.462	13.500	6.103	20.167	5.390	20.458	5.220
6.420	20.000	4.743	21.833	7.893	20.667	5.878
5.042	23.500	7.697	18.625	4.626	19.625	6.068
2.566	7.250	3.031	8.792	3.266	8.417	3.535
2.470	9.000	0.707	9.875	2.934	9.792	3.095
2.718	10.250	1.920	9.542	2.549	10.250	2.385
6.247	62.000	4.416	61.042	9.994	61.167	7.034
5.006	15.500	3.202	8.375	5.604	11.292	4.514
4.412	14.250	2.861	8.000	4.664	11.833	3.300
4.973	16.000	2.121	7.333	5.383	8.958	4.514
4.882	12.250	4.146	6.542	4.856	9.792	3.582
4.223	12.000	3.742	9.542	4.734	10.917	4.173
2.925	12.250	4.265	10.250	4.003	11.125	3.982
2.934	13.000	1.871	12.500	3.606	13.750	4.719
3.482	5.500	2.291	12.292	4.650	11.667	4.069
4.179	12.250	2.487	12.000	3.905	14.875	3.059
4.475	8.250	2.861	10.917	4.329	10.542	4.291
3.946	7.250	2.487	11.042	5.473	10.958	4.614
5.517	6.250	4.710	13.792	4.975	13.083	5.033

図 2 8 職業興味“機械的領域”の中退群と修了群との比較

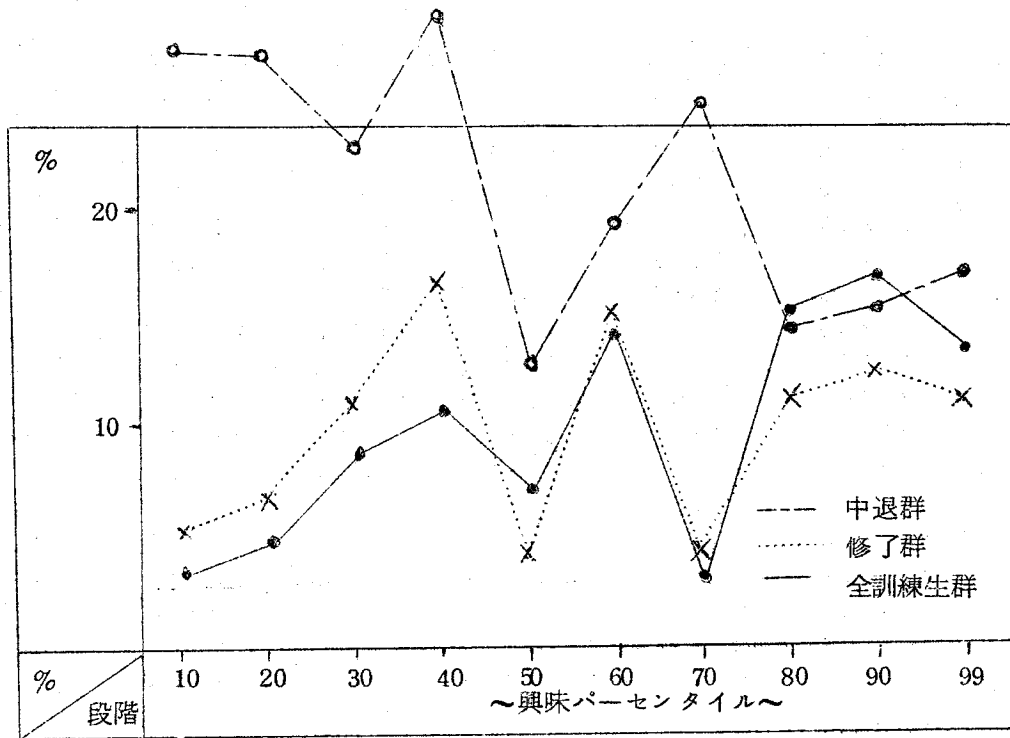
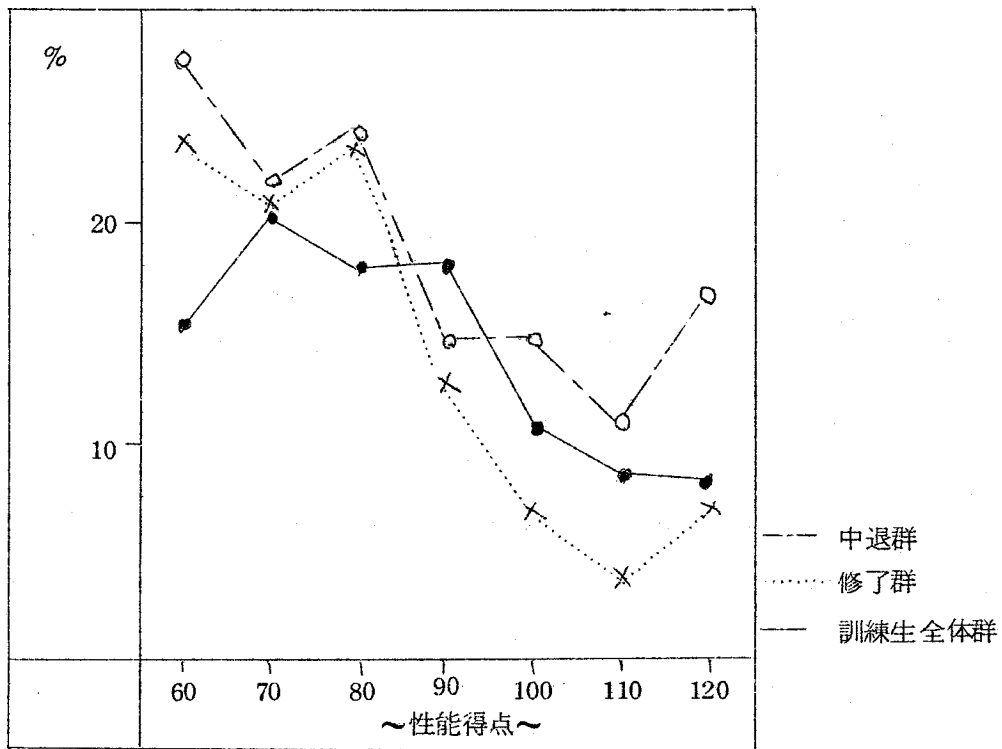


表 2 9 中退類型ごとの職業興味“機械的領域”の分布

類型 \ 段階	10	20	30	40	50	60	70	80	90	99
I 身体的欠陥			2			1	1		2	2
II 家庭の危機		1				1		1		1
III 知的素質	1			1		2		4	2	
IV 興味要因	1	2	3	2						
V 素行不良	1	1	1	2		3	1		3	1
VI 入校直後中退										
VII 他へ進路変更				2				1		2
VIII 長期欠席	1	1	2	5	3	4	1	2	2	2
	4	5	8	12	3	11	3	8	9	8
Dropouts N = 71	5.6	7.0	11.2	16.9	4.2	15.4	4.2	11.2	12.6	11.2
Graduates N = 294	3.7	4.7	8.8	10.9	7.1	15.3	3.4	15.6	16.6	13.6



図 30 一般知能値における中退群と修了群との比較



I	身体的欠陥	3		2		1	1	1	89.5
II	家庭の危機	1	1	2					73.5
III	知的素質	2	5	1	2				75.2
IV	興味要因	2	2	3	1				76.4
V	素行不良	3	4	2	3				80.3
VI	入校直後中退								
VII	他へ進路変更			1	1	1	1	1	105.4
VIII	長期欠席	6	3	6	2	3	1	2	85.8
		17	15	17	9	5	3	5	
	Dropouts N = 71	23.9	21.1	23.9	12.6	7.0	4.2	7.0	
	Graduates N = 282	15.6	20.9	18.0	18.0	10.6	8.5	8.1	
		60 under	70	80	90	100	110	120 over	

2 8.3%で、知能が高い者が多い。

このように知能の低い者が高い者より中退する傾向が強い。

さらに、この傾向を8類型についてみると、< pattern 3 >< pattern 4 >< pattern 2 >に知能得点が低くかたよる傾向がみられる。

< pattern 3 >は“学科実技ともにかんばしくなく”と中退理由にかかれているものであり、これを検査で予測できることを示している。また、< pattern 4 >は興味要因による中退であるが、能力と興味がある程度相関することからして、納得できる傾向である。

また、他の教育機関への進路変更< pattern 7 >には極度に知的素質の低い者はいない。

### 3-3 興味と知能との関連からみた中退

前節の通り、職業興味検査による訓練職種に関する興味領域の得点、および知的素質が中退に関連することがわかった。

そこで、この両者を組合せて、訓練職種科ごとの中退との関連をみよう。

なお、ここでの知的素質の指標は田中全B知能検査の知能偏差値を用いた。資料は千葉総訓昭和48年度を検討した。

その結果は、一般的にはそのクラスの個性検査の傾向から、遊離している訓練生が中退する。

つまり、知能と興味がともに低い場合、知能も興味も高い場合、知能が低く興味が高い場合などである。

図31(a)にみるように、修了生の黒丸印をつつむように中退群×印が囲む型となっている。

この傾向が典型的にみられるのは、木工科、板金科、自動車整備科二類である。

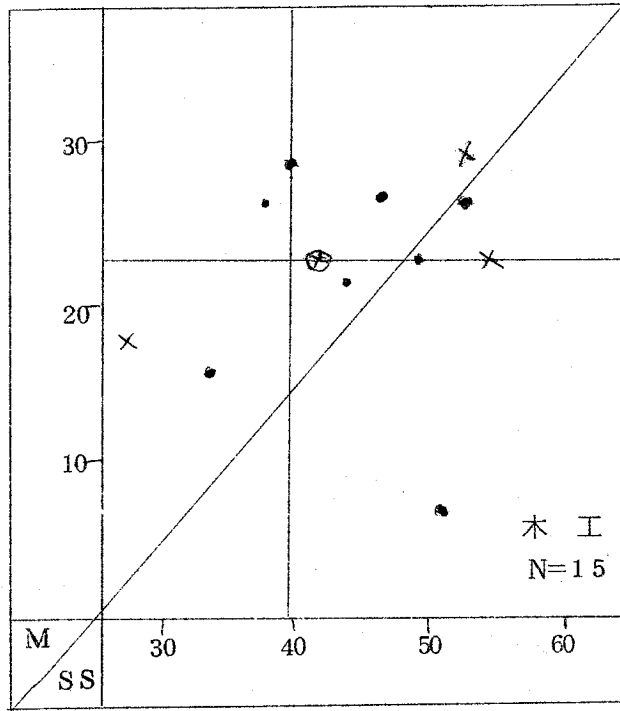
特例として自動車整備科では興味を知能との関連がなく、中退現象を生じている。

さらに、クラスで最も知能得点の高い群に属する者が中退する傾向が木工科、電気科、溶接科、板金科にみられるのは注目に値する。(図31(a)~(l)参照)

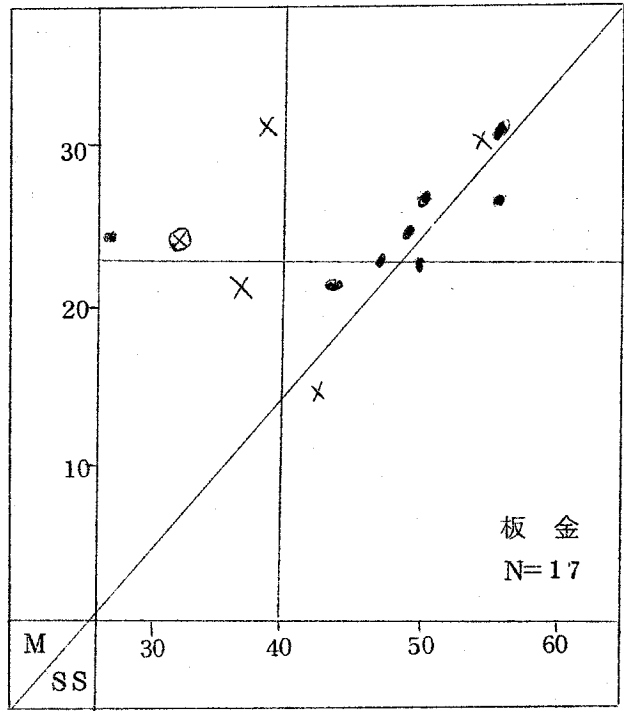
つまり、Capableな訓練生が中退するのは、訓練内容に問題があるとか、訓練のカリキュラムまたは実技の進行がおそいなど、訓練生自身の期待に訓練がこたえなかったことを示しているのではあるまいか。<sup>12)</sup>

以上のように、心理検査を用いて中退を予測するには、一般的にみて、職業興味検査における“機械的領域”で得点の低い者、さらには知能検査、あるいは職業適性検査の一般的知能で極度に低いか、高い者に注目する必要がある。この点についての事例検討は第一章第3節にすでに述べたので、参照していただきたい。

図 3 1 - (a) 興味と知能との関連

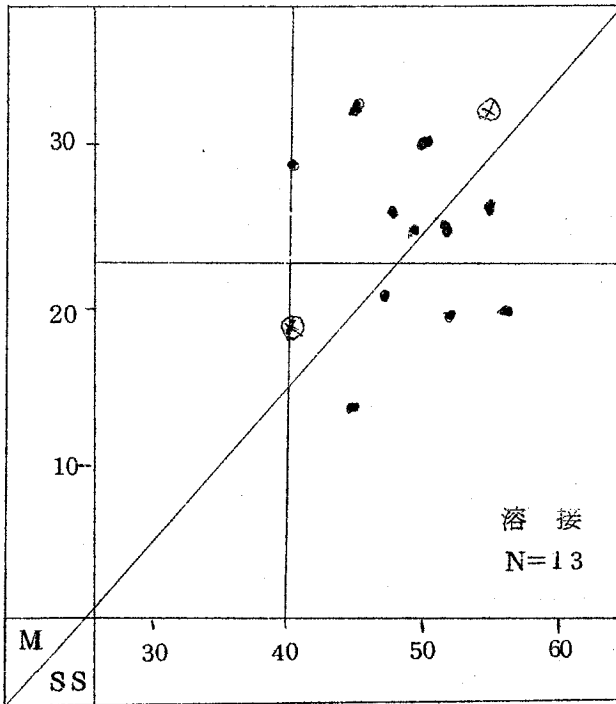


(b)

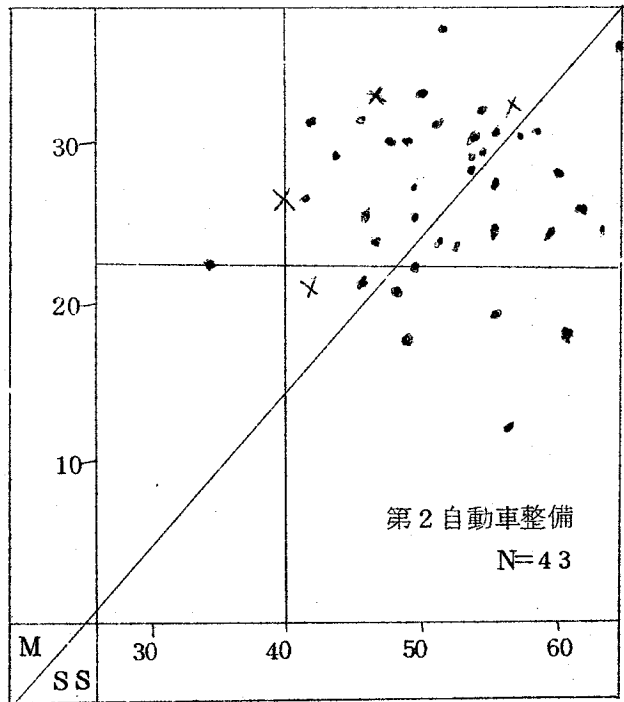


× 1年次中退者   ⊗ 2年次中退者   • 修了者

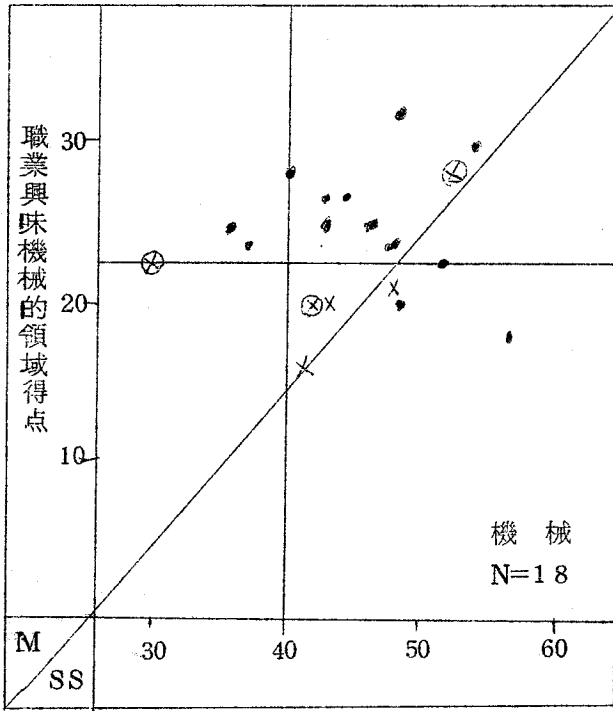
(c)



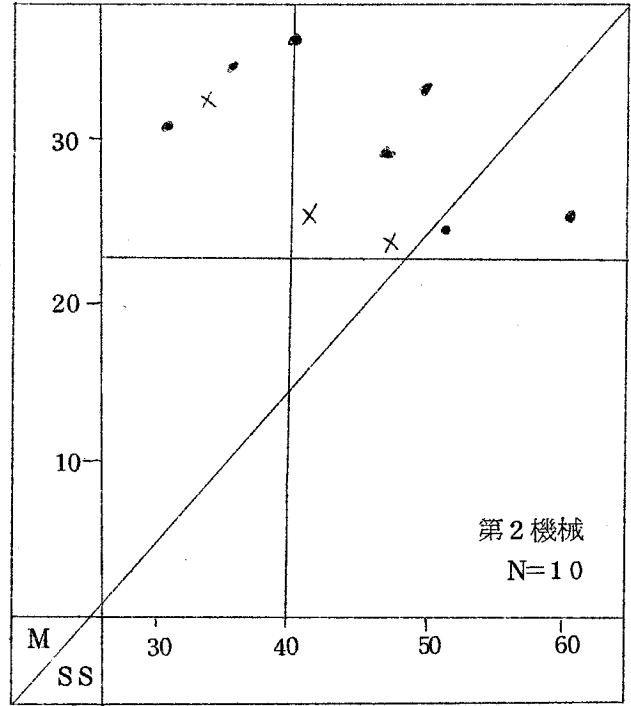
(d)



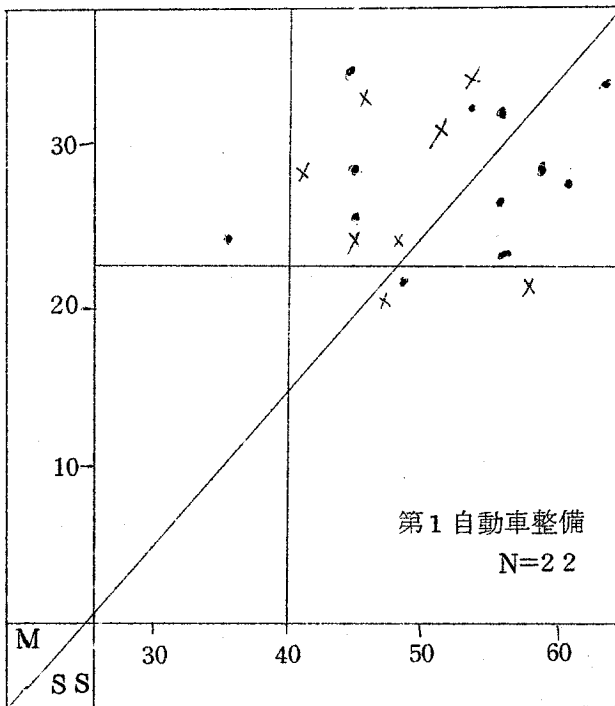
(e)



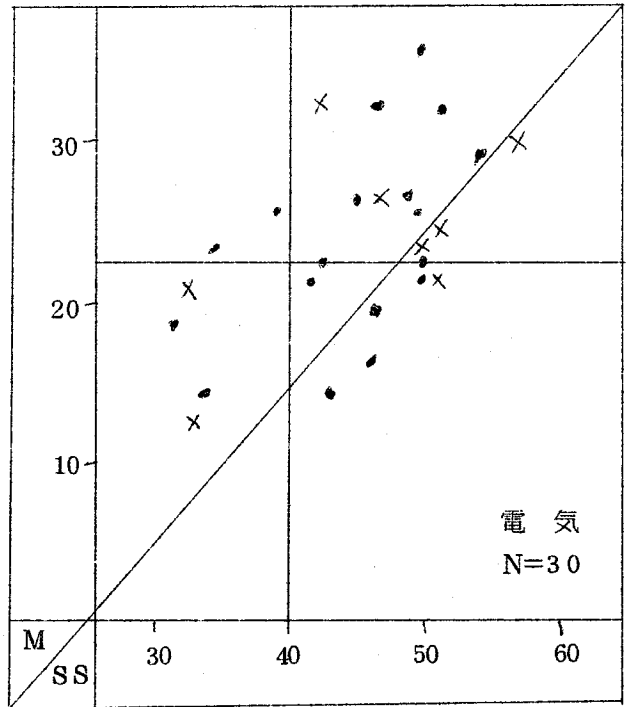
(f)



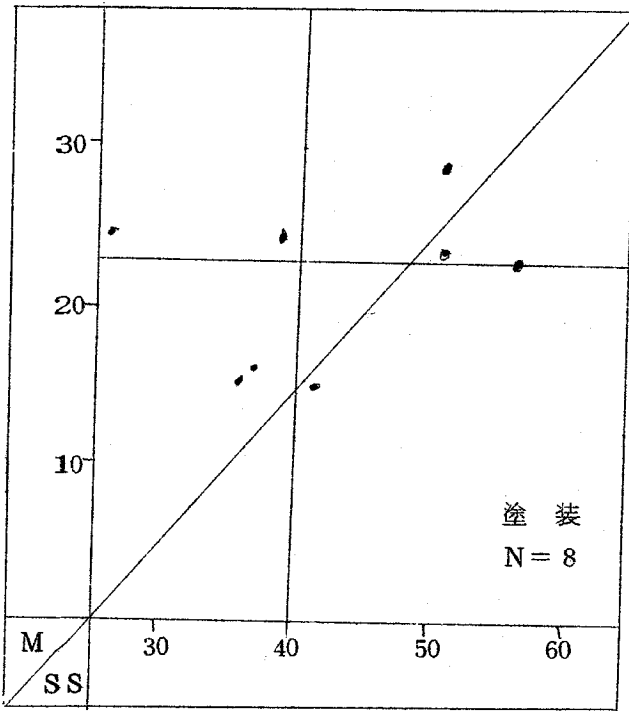
(g)



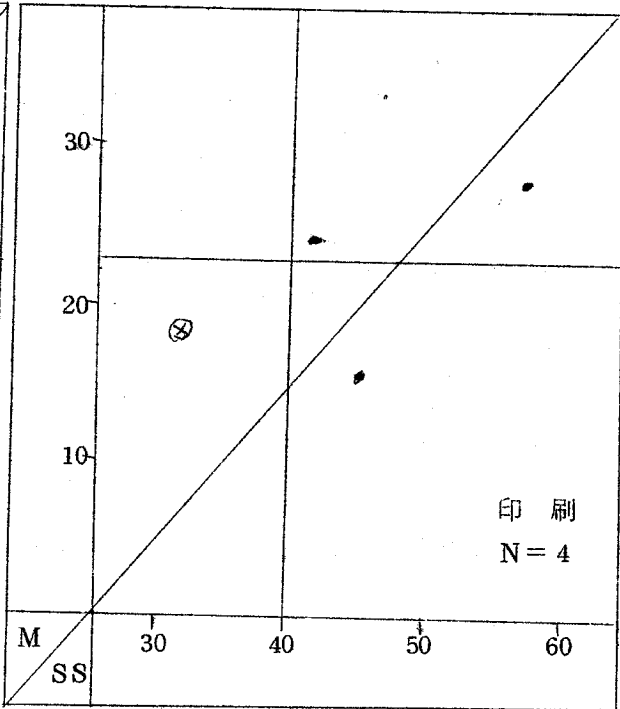
(h)



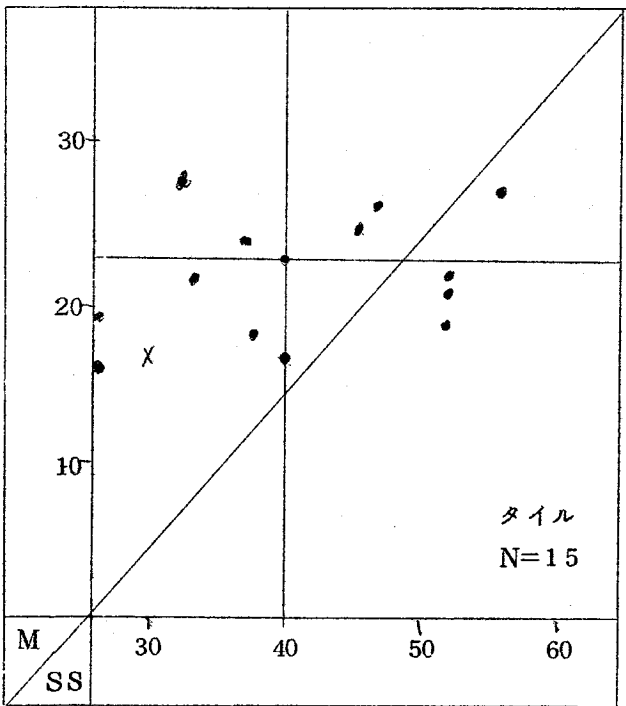
(i)



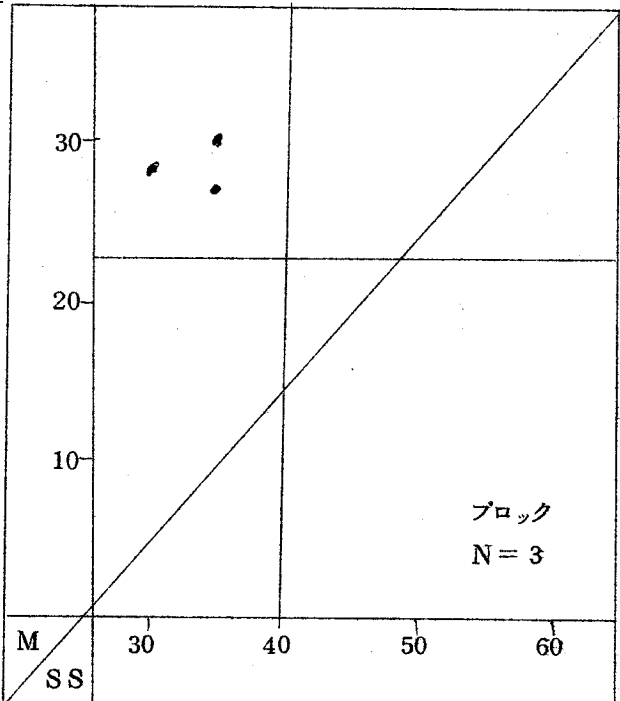
(j)



(k)



(l)



#### 4. まとめ

中退する可能性のある訓練生を訓練初期に予測することが可能であるかどうかを、職業興味検査、性格検査、知能検査、職業適性検査を併用して検討した。

その結果、訓練校におけるすべての中退を心理検査によって予測することはできない。

ただし、〈pattern 3〉〈pattern 4〉の個性要因にもとづく中退は、かなり正確に予測できることが実証された。

つまり、個性要因による中退は訓練初期に発見できる。しかしながら、知能が極度に低い者、あるいは興味がない者がみつかったもそれに対処する指導方法が充分に開発されていない。これは今後の課題となる。

以上のように、心理検査が中退者の予測に全面的には有効でないということがそのまま心理検査による訓練生理解が不必要であることを意味するものではない。

入校直後に行われるこれらの心理検査は個性理解を、担当教師が主観的に理解することを助けるものであり、実技、学科指導、および生活指導の手がかりになりうる。

付言すれば、この種の検査は振り落とすための入校試験に用いられるべきではなく、入校してから、オリエンテーションの過程で実施され、訓練生をよりよき方向へ指導する助けと解すべきであろう。

従来、中退問題のアプローチとして、「中退群」と「非中退群」を二分する方法をとることが多かった。しかし、個性検査の結果をみても、数多くの境界線事例が存在するのであり、ある種の条件が負荷されると「在校生」もたちまち「中退者」となる可能性がある。

ゆえに、「中退」と「非中退」を非連続なもののみならず、一つの連続をなすものと解釈すべきである。

本研究の事例の中にも、知能が低くとも、あるいは職業興味が一致していなくとも、2年間の訓練過程を修了している者もある。これらの訓練生はどのような好条件がととのっていたのか、今後検討する必要もある。

引用文献

14) Super.D.E 1962

職業的発達理論の研究

(日本職業指導協会)

15) Bell.J.W 1967

A comparison of dropouts and nondropouts on participation in school activities

(J of educational research VOL60, №6)

16) Amble.B.R 1967

Teacher evaluation of student behavior and school dropouts

(J.of educational research VOL60, №9)

17) Droege.R.C 1968

Occupational aptitudes of high school dropouts

(Vocational guidance Quarterly March 185-187)

18) French J.L.& Cardon B.W 1968

Characteristics of high mental ability school dropouts

(Vocational guidance Quarterly March 162-168)

19) Elliott.D.S. 1966

Capable dropouts and the social milieu of the high school

(J.of educational research VOL60, №4 P180-186)

### 第3節 訓練生の生活意識とカウンセリング

#### 1 はじめに

訓練生が中退意志を表明してからでは、実際上どのような指導も不可能なことは中退原因をさぐる過程で繰返し確認された。それでは、中退する意志、あるいは行動があらわれる前に、なんらかの指導をおこなう手がかりは何に求めたらよいのであろうか。

その手がかりの一つとして、訓練生が彼らをつつむ環境をどのように意識して生活しているかを把握することが必要であろう。つまり、訓練生が訓練校の環境、また家庭環境をどのように認識しているかを知り、それをもとに訓練生と対話すれば、訓練生自身の悩み、不安のある種のは解消するであろうし、さらに、訓練をする側としては、現状訓練をどのように改善すればよいか、その方向性をつかめると思われる。

このように、訓練で学ぶ者と訓練をする者との相互啓発として、カウンセリング機能を位置づければ、必然的に中退も減少すると推測される。

ところで、教育訓練機関を途中で退学する者と修了する者との間には、生活意識の側面で、明確な区分が存在するものではないが、意識の上で一つの連続をなすものであると考えられている。

(安藤延男, 1969)<sup>7)</sup>

しかるに、総高訓における中退者指導の前提として、あたかも、中退者に特有な生活意識が存在するがごとく理解する 경우가多く認められた。

そのために、中退者は特異な存在であるがゆえに一般の指導対象とはされず、放置されている。また、在籍訓練生においても、生活意識を客観的に理解した上での指導は行われていない。ところで、中退を減少させようとする立場には、つぎの二つがある。

一つは、直接的に防止しようとする立場、もう一つは、間接的に減少させようとする立場がある。

本節における訓練生の生活意識の把握に関するアプローチは、後者の間接的な立場といえる。つまり、中退者をすべて訓練校不適応者とみるのではなく、修了訓練生とそれほど異ならない生活意識にあるという認識の上で訓練校に在籍する訓練生全体に対して、なんらかの、生活意識を基礎にした指導を展開する原理を求めようとするものである。

ただし、ここで指導の範囲をいわゆる生活指導にしほってよいかどうかには疑問があるが、教科指導と生活指導とに分けたうちでは、やはり生活指導の重点的な指導領域となろう。

生活意識を基にした生活指導とは、まず、i) 訓練生の悩み、問題を発見する。ii) どのように指導するか、その手がかりをみい出す方法を開発する。iii) 訓練生の悩みを解消する。iv) 訓練生



の生活に対する満足感を高める。V) 中退しようとする意識がかわる。というような図式を考えている。

別の表現をすれば、現状の総高訓の訓練で、訓練生自身にとって欠如しているものはなにか、そして、生活指導 (Guidance) 領域でおぎなえるものはなにかを明確にして、新しい指導体制を考える基礎をきずくものともいえる。

## 2. 訓練生の生活意識に関する先行研究の検討

訓練生の生活意識全般について調査した文献は若干ある。(森和夫1971,<sup>19)</sup> 戸田勝也1968<sup>20)</sup>しかし、中退現象とのかかわりで、訓練生の生活意識を調査したものは皆無である。

また、高校段階の生徒についても、一般的な調査はあるが、(文部省1973総理府青少年局1968<sup>21)</sup>中退との関連でみようとしたものはない。ただし、大学段階では留年という現象として若干の研究がおこなわれている。(丸井文男、久保良敏、石郷岡泰、1969)

さらに、中退そのものではないが、学校生活への青年の適応を追求したものとしては、大西誠一郎ら(1966, 1965),<sup>22)</sup> 東京都立教育研究所(1970),<sup>23)</sup> 橋爪一男(1972),<sup>24)</sup> 増田幸一(1967),<sup>25)</sup> 仁藤友雄(1968)<sup>26)</sup>がみられる。

## 3. 生活意識をとらえる手段の検討

生活意識を適応指導との関連でとらえている先行研究の調査カテゴリーは様々である。例えば、大西誠一郎は、勉強のこと、学校生活、卒業後の進路、友人関係、健康・容姿、家庭生活、人生・社会をあげ、増田幸一は学業・性格・能力・学資・アルバイト、将来の職業、交友・異性間のこと、学生生活・クラブ活動、健康、家庭、その他を生活意識をとらえるカテゴリー(領域)としている。

われわれは、Guidance の基本的な実践に結びつくことを配慮して、古典的ではあるが、A・J ジョーンズのガイダンス領域の分類に従って、大きなカテゴリーはつぎのように選定している。

つまり、訓練学習領域、健康領域、人間関係領域、そして職業・進路領域である。これらが、Guidance の四つの領域に対応する。

さらに、生活意識を把握するアプローチを二つに分けて調査している。

第一は、訓練生の悩みがどこで発生しているか、把握するアプローチである。

つまり、訓練生の悩みが、i) 家庭で発生しているのか、ii) 家庭から訓練校の間の場所で発生しているか、iii) 訓練校生活で発生しているかを調べるのである。

第二は、訓練校の中で、どのような領域に悩みが生じているかを調べるのである。  
いずれも、調査方法は質問紙法を用いている。

#### 4. 生活意識の様相 (その1)

～悩みの発生する場所～

##### (1) 調査目的

訓練校離脱の現象は、訓練生が訓練場面において緊張感が生じ、この緊張から緊張緩和への力動的過程と解釈できる。(塚田, Super)

つまり、緊張感生起による不均衡状態から均衡状態へと移行していく手段として中退という行為を選択したものと思われる。

一般に、生活体に生起する緊張感は、全体的事態の力の場に等質性が失なわれた場合であり、この原因は生活体の内部情勢に変化が生じるか、外部的情勢に変化が生じた場合、今までの全体の場に新しいエネルギー変化が生じるところとなって、釣合いのとれた平衡状態を破ろうとする力が生起する。この力が緊張感で、心的作用を左右すると考えられる。

ところで、訓練生においては、どのような場面に緊張感を生じている場合が多いのであろうか。本調査では、在籍訓練生の生活場面を4つの環境に区別して、生活意識の様相を把握しようとしている。

イ) 家庭での生活環境

ロ) 家庭から訓練校までの生活環境

ハ) 訓練校での生活環境(I)

(主として時間内での場面)

ニ) 訓練校内での生活環境(II)

(主としてハ) 以外の場面)

この調査の目的は、以上のような場面ごとに、生活意識の実態を明確にし、それをもとにした個人指導への方法を検討することである。

##### (2) 方 法

本校、昭和48年度入校生について、1年次の12月に、質問紙法による「生活意識について」の調査を実施している。

調査対象は中卒訓練生99名、高卒訓練生は40名である。

なお、高卒訓練生は自動車整備科（第二類）である。他科一類課程にも5名ほど高卒者が在籍しているが分析の対象からはずしている。

### (3) 調査結果

#### a 家庭での生活状況

訓練生が家庭における人間関係でうまくいっているが、自己表現の機会があるかを問うている。一般に、多数の在校生は訓練校に行くということは、高校に進学しない。あるいはできないために消極的な進路選択をしたと言われている。それがために、訓練生自身が劣等感に悩むこともありうる。

その原因が家庭における訓練校の評価に結びついていることも考えられる。

問A-3にみるように、「家庭で訓練校は、一般高校とくらべて、どのように話されているか」と言う時、「訓練校は高校よりもよい点が多い」と反応している者が20.1%であり多くない。それに対して、「訓練校は高校よりもたいしたことはない」26.2%、「訓練校は高校よりも悪くみられている」22.2%で約半数の訓練家庭では高校より「たいしたことはない」「悪い」と評価されている。（表32）

また、「家の人達があなたが訓練校に入学することに賛成したわけ」では、「自分が訓練校にゆきたい希望を話したから」が最も多く37.3%で、「家がわから高校より訓練校へ」は23.2%で、訓練生自身の意志がやや多い、この傾向は高卒訓練生については、さらに強く、「自分の希望」が65%である。

さらに、家庭の人間関係で問題となるのは、〔問A-1〕「家庭で訓練校のことについて、話や質問ができるか」に対して、「でない」が中・高訓練生とも約2割ある。〔問A-5〕「家庭で、あなたが大事な話をしようとするとき、みんな相手にしてくれるか」に対して、「自分の言っていることをよくきこうとしない」が9.0%がある。さらに、〔問A-9〕「いま訓練校をやめるといったら、家で心配するのはだれか」では、多くの訓練生が父母をあげているのに、「だれも心配しない」が中卒者で9.0%、高卒者で2.5%（1名）である。

このように、家庭の中での自分の存在意義が認められていなかったり、人間関係がまずかったり自己表現の機会がないと、心的緊張を生じると考えられる。

#### b) 家庭から訓練校までの環境

中退理由の中に、訓練校への通学途上での問題が表現される。「不良にからまれるのがいやだ」

とか、"なぐられるのが恐しくて……"というような非行行為における被害者が悩みを訴えることがある。

本調査では、この点について"家から訓練校につくまでの間で、つらいこと、いやなことがありますか"と問うている。(表33)

反応が最も多いのは、中高訓練生とも、"夕方家につくのが、おそくなるのでいやだ"という項目で、中卒者が45.4%、高卒者32.5%となっている。これに付随して、"朝、早く起きなくてはならないのがつらい"が中卒者で26.2%となっている。これは訓練生の耐性の弱さが問われるべきものではなく、実際に交通機関を用いての遠距離通学が多いことが反映している。この物理的条件は後にも述べるように、クラブ活動が不可能になったり、疲労が重なったりして、精神的条件にも影響している。

また、"通学の途中よその学校の不良学生と同じ方向なのでいやだ"は中卒者22.2%、高卒者12.5%で比較的多い。同様に、"通学途中に悪い友達がいるのでいやだ"は中卒者17.1%、高卒者が0%で、さすがに高卒者になると、"悪い友達"というとらえ方はないようである。

さらに、通学途上でも家庭と同様に、他の高校生、あるいは社会人による訓練校の社会的評価が訓練生を悩ませる場合も多い。この結果が中退に結びつくこともありうる。

以上のように、通学途上では、通学距離と訓練終了時間との関連、および不良グループとの関係などが、訓練生の悩み、不満の原因になりやすいことがわかる。

### C) 訓練校内における環境(I)

中卒者と高卒者とで意識の異なるのは、一般学科、専門学科である。

"一般学科でももしろくない時間が" "多い"が中卒者で43.4%、高卒者で2.5%、逆に"もしろくない時間が少ない"では中卒者が42.4%、高卒者が12.5%となり、中卒者では一般学科に対する不満意識と満足意識は半々になっている。高卒者の場合、一般学科は少ないので反応が出ていない。(表34参照)

専門学科については、中卒者に"もしろくない時間が多い"とする反応が多い。

また、実技・学科が"むずかしい"に対する反応は中卒者で約4割、高卒者で約1割で、"中卒者は、むずかしい"ととらえている者が多い。

"入学前に聞いた訓練校の内容と実際がちがう"ということが中退理由にできることもあるが、"違って、いやだ"は中卒者で17.1%、高卒者で7.5%である。同じ間で"耐えられない"と訴えている者は、7名ほどいる。

同様に、"自分の希望した科に入れなかったので、希望科に入った人を見ると訓練校に来るのがいやになる"とする者が中卒者に1名(第2機械)、"耐えられない"とする中卒者が3名(第2機械、自動車整備、溶接に各1名)みとめられる。

さらに、"実習でいやになったこと、つらいこと"では中卒者と高卒者で意識が明らかに相違している。"むずかしい" "きたない" "先生がおこる" "いつも悪い見本のようにはかできない"などの項目で、中卒者は10%代の反応をしめすのに対して、高卒者は約5%の反応で少ない。つまり、全般的な実習に対する不満足は17.0%と比較的少ないが、実習場面についてみても不満は少ない。

ただし、実習場の温度的な条件には強い不満を示している。

#### d) 訓練校内の環境(2)

問〔D-1〕では実習における失敗のうけとめ方を聞いている。訓練生の中には"家に帰って寝るまでそのこと~~を~~思いだされる"とする者が中卒者で18.1%いる。また、"学科や実習の時間中公平かつ平等にあつかわれているか"という問〔D-5〕に対して、"みんなと差別してあつかわれている"という意識にある者が中卒者で23.2%、高卒者で5.0%いるが、約6割の訓練生は、"公平にあつかわれている"と回答している。(表35参照)

さらに、訓練校における技能習得の意識を〔D-4〕で"いままでに受けた職業訓練で何かあなたの身についたことがありますか"と問っている。それに対して、中卒者は"あった"53.5%,"すこしあった"35.3%と回答し、高卒者では"あった"70.0%,"すこしあった"22.5%である。逆に"訓練生のことを考えただけでいやになる"は中卒者に5.0%あるのみで、高卒者にみとめられない。このように、"職業訓練で身につく"という実感はすくなくとも本調査の実施時点(1年次12月)にはかなり程度が高い。これはある面での訓練継続意志に結びつくであろう。

それに対して、直接的に中途退校意識を〔D-8〕で、"入校してから今まで退学したいと思ったことがありますか"と問うと、"何回か、うかんだことがある"が32.3%,"1回うかんだことがある"9.0%、逆に、"まだ1回もうかんだことがない"が33.3%である。このように、約4割の訓練生は何らかの意味で退校意識をいだいた経験がある。この退校意識がそのまま中退行動に結びつくものではないが、ある条件が重なると中退行動にいたる下位意識をもっている訓練生が約半数近くいるとも解釈できよう。

以上、訓練生がどの場面で心的緊張を生じているか、を概観した。

表3 2 a 家庭での生活環境

	質 問 項 目	反 応 肢	
A - 1	あなたの家庭では、訓練生のことについて話や質問が出来ますか	ア	よくでる
		イ	たまにでる
		ハ	でない
A - 2	あなたが家庭で、訓練生のことについて、おもにだれと話しますか	ア	父と自分
		イ	母と自分
		ウ	きょうだいと自分
		エ	祖父母と自分
		オ	だれとも話さない
A - 3	あなたの家庭では訓練生のことについて、あなた以外で、だれとだれが話していると思いますか。	ア	母ときょうだい
		イ	父ときょうだい
		ウ	祖父母と父母
		エ	だれとも話していない
		オ	わからない
A - 4	あなたの家庭では、一般高等学校とくらべて、どのように話されていますか	ア	訓練校は、高校よりもよい点が多い
		イ	訓練校は、高校よりもたいしたことはない
		ウ	訓練校は、高校よりも悪くみられている
A - 5	家庭で、あなたが大事な話をしようとするとき、みんなどんな相手をしてくれますか	ア	自分の言っていることをきこうとしない
		イ	自分のいいぶんを強いんにおす
		ウ	自分が話をすると、いつもケンカになる
A - 6	家の人達は、あなたが訓練校に来ていることを近所の人達にどのように話していると思いますか	ア	にこにこしながら、ほこらしげに話している
		イ	はずかしそうにしている
		ウ	自分のことになると話をそらしている
		エ	しゃくにされることばかり話している

反 応 実 数											反 応 率	
									N=99	N=40	中卒訓練生	高卒訓練生
0	0	0	2	1	1	1	2	0	7	3	7.0	7.5
13	10	5	8	9	9	9	5	2	70	26	70.7	65.0
7	5	2	2	1	2	0	0	1	20	10	20.1	25.0
7	2	4	4	7	7	8	4	0	43	21	43.4	52.5
7	7	1	5	7	4	4	4	1	40	21	40.4	52.5
2	7	1	3	3	1	2	0	1	20	7	20.1	17.4
0	2	1	0	2	1	1	0	0	7	1	7.0	2.5
8	3	1	3	0	2	0	0	1	18	10	18.1	25.0
3	1	0	2	1	1	0	1	0	9	6	9.0	15.0
3	0	0	1	0	2	0	1	0	7	4	7.0	10.0
0	0	1	1	1	0	1	1	0	5	1	5.0	2.5
4	3	1	2	1	0	1	0	1	13	8	13.1	20.0
10	9	5	5	7	9	7	5	2	59	16	59.5	40.0
1	2	1	3	5	5	2	1	0	20	6	20.1	15.0
7	4	1	0	3	5	2	2	2	26	4	26.2	10.0
2	5	2	3	2	1	2	4	1	22	3	22.2	7.5
3	3	0	0	0	3	0	0	0	9	0	9.0	0.
4	5	4	1	3	5	2	3	3	30	7	30.3	17.4
1	0	0	1	0	1	0	2	0	5	2	5.0	5.0
1	4	0	4	0	2	1	1	1	14	1	14.1	2.5
0	3	1	2	3	1	0	5	0	15	1	15.1	2.5
1	1	0	1	0	2	0	1	1	7	0	7.0	0
0	1	2	1	0	1	0	0	1	6	0	6.0	0

A - 7	家の人達はあなたが訓練校に入学することを賛成したわけは	ア きょうだいの中で頭があまりよくないから イ 高校に入れなかったから ウ 自分が訓練校に行きたい希望を話したから エ 家の人達から高校より訓練校へ… オ 就職するには早すぎるという考えから
A - 9	あなたが、いま訓練校をやめると言ったら家で心配するのはどれですか	ア 父 イ 母 ウ きょうだい エ だれも心配しない オ わからない

表 3 3

b 家庭から訓練校までの環境

B - 1	家をでて訓練校につくまでのあいだで、つら こと、いやなことがあ りますか その理由について、ど のようなものがあるで しょうか	ア 朝早く起きなくてはならないのがつらい イ 家を出て駅まで歩く時間がながいのでつらい ウ 通学の途中犬や、へビが道にとび出してくるのでいやだ エ 通学のとちゆうに悪い友達がいるのでいやだ オ 通学のとちゆうよその学校の不良学生と同じ方向… カ " くつやズボンが汚れるのがいやだ キ 夕方家につくのが、おそくなるのでいやだ ク 訓練校できめられた通学用の服装がいやだ ケ 電車(またはバス)が混むのでいやだ コ こづかい銭がかかりすぎるのでいやだ サ 通学時間がながいため、腹がへるのでつらい シ 以上のほかに……



1	2	0	1	2	0	0	3	1	10	0	10.1	0
5	3	6	2	1	2	1	1	1	22	1	22.2	2.5
4	6	0	5	3	9	6	3	1	37	26	37.3	65.0
3	2	1	5	5	3	4	0	0	23	0	23.2	0
4	2	1	2	3	0	0	2	0	14	2	14.1	5.0
13	7	4	5	4	9	8	3	1	53	28	53.5	70.0
12	11	4	9	8	6	8	4	2	64	26	64.6	65.0
5	3	2	4	1	2	3	1	0	21	10	21.2	25.0
0	1	2	0	0	4	1	1	0	9	1	9.0	2.5
5	3	0	0	2	1	1	2	1	14	6	14.1	15.0

反 应 实 数										反 应 率		
7	3	0	2	4	1	5	3	1	26	4	26.2	10.0
0	1	0	1	0	1	1	0	0	4	0	4.0	0
4	2	5	2	5	2	4	1	1	26	7	26.2	17.4
2	1	1	1	2	1	2	2	1	13	1	13.1	2.5
4	1	0	3	3	0	3	3	0	17	0	17.1	0
4	5	3	2	0	4	2	1	1	22	5	22.2	12.5
8	8	3	5	8	3	6	5	0	45	13	45.4	32.5
2	3	1	0	2	1	0	0	1	10	1	10.1	2.5
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	1	0	4	1	0	0	0	0	6	0	6.0	6
0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	2.0	0

表 3 4

## c 訓練校における環境

	質 問 項 目	反 応 肢	
C - 1	訓練校内のことについて次の質問に答えてください		
	ア 一般学科でおもしろくない時間が	a	多 い
		b	少 ない
	イ 専門学科でおもしろくない時間が	a	多 い
		b	少 ない
	ウ 実習でおもしろくない時間が	a	多 い
		b	少 ない
	エ 朝礼の時間が	a	長すぎる
		b	いやだ
	オ 実 技 が	a	むずかしい
		b	いやだ
	カ 学 科 が	a	むずかしい
		b	いやだ
	キ くだらない友達におこられることが	a	気になる
	b	いやだ	
ク 先生におこられることが	a	いやだ	
	b	耐えられない	
ケ みんなにバカにされることが	a	よくある	
	b	たまにある	
	c	な い	
コ 昼食や寄宿舎の食事が自分の口に 合わないので	a	いやだ	
	b	耐えられない	
サ 校内に不良学生がいるので毎日が	a	おそろしい	
	b	不安である	
	c	いやだ	
シ 入学前に聞いた訓練校の内容と実 際がちがう	a	いやだ	
	b	耐えられない	
ス 自分の希望した科に入れなかつた ので、希望科に入った人を見ると 訓練校に来るのが	a	いやになる	
	b	耐えられない	

反 応 実 数									反 応 率			
									中卒者	高卒者	中卒者	高卒者
									N=99	N=40		
12	6	2	3	2	4	7	5	2	43	1	43.4	2.5
5	4	5	7	5	9	3	3	1	42	5	42.4	12.5
6	6	2	1	1	3	3	4	0	26	3	26.2	7.5
8	5	5	10	5	9	7	4	3	57	21	57.5	52.5
3	3	3	3	0	0	1	3	0	16	3	16.1	7.5
3	10	4	8	9	12	8	5	3	70	23	70.7	57.5
0	4	1	0	0	6	2	3	1	17	5	17.5	12.5
1	6	2	9	9	6	5	3	2	53	9	53.5	22.5
6	3	2	11	2	5	3	6	3	41	5	41.4	12.5
0	1	0	0	1	2	1	0	0	7	1	7.0	2.5
7	1	2	12	4	6	3	4	1	40	5	40.4	12.5
0	4	0	0	2	3	2	2	2	18	2	18.1	5.0
4	1	1	4	1	2	3	1	1	18	2	18.1	5.0
5	4	1	5	1	3	2	2	1	24	0	24.2	0
7	3	2	4	2	3	3	3	2	29	1	29.2	2.5
0	1	1	1	1	1	1	3	0	9	2	9.0	5.0
2	1	0	2	1	1	0	4	0	11	2	11.1	5.0
9	4	3	6	7	7	6	3	1	46	7	46.4	17.4
5	9	4	3	2	5	3	1	2	34	15	34.3	37.5
1	3	1	2	5	4	1	2	0	19	3	19.1	7.5
4	0	1	1	7	3	0	1	1	18	3	18.1	2.5
2	0	0	2	0	0	0	3	0	7	0	7.0	0
5	2	3	1	0	2	1	2	0	16	0	16.1	0
1	0	0	0	0	1	0	1	1	4	0	4.0	0
5	1	1	2	0	1	1	5	1	17	3	17.1	7.5
0	2	1	2	0	2	0	0	0	7	0	7.0	0
0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1.0	0
0	0	1	1	0	1	0	0	0	3	0	3.0	0

C-1	セ	以上のほかにまだありましたら		
C-2		あなたは、実習をやっているとき、どんなことを考えていますか	ア	実習中は夢中になっているため、なんの考えも浮ばない
			イ	なぜ、このような実習をやっているのかわからない
			ウ	早くおわらせたいと
			エ	人よりも、きれいにやりたい
			オ	実習は学科より大切と思うからやっているだけ
			カ	サボっていると、すぐ目につき先生におこられるからやっているだけ
C-3		あなたは現在の実習で、いやなことやつらいことがありますか。 その理由について、どのようなものであるでしょうか	ア	むずかしい
			イ	きたない
			ウ	失敗すると先生がおこる
			エ	けがをしそうであぶなつかしい
			オ	実習場の中があつい
			カ	" が寒い
			キ	失敗したとき笑われる
			ク	いつも悪い見本のようなものしかできない
			ケ	競争が多い
			コ	以上のほか

## 5. 生活意識の様相 (その2)

～訓練校生活における悩み～

### (1) 調査目的

現在、総合高等職業訓練校に在籍している訓練生が訓練校生活に関して、どのような気持で生活しているか、また、どのような領域に不満・悩みをもっているか、など生活意識について、集団的な傾向をつかむことを目的とする。

さらに、その結果をもとにして、カウンセリングを前提とした、訓練生理解の考え方を考察しようとするものである。

※ 本節は、「訓練生理解の方法」と題して、日本産業教育学会(1974, 9.29.)で口頭発表したものである。

※ なお、内容の一部については、「職業訓練と進路指導」と題して、「職業訓練」誌、(1974, 9)に報告している。<sup>27)</sup>

1	4	0	1	0	0	0	0	0	6	2	6.0	5.0
4	3	3	3	5	10	2	0	0	30	12	30.3	30.0
2	1	0	0	2	0	1	0	0	6	3	6.0	7.5
7	3	0	2	1	1	4	0	0	18	4	18.1	10.0
5	4	2	3	9	7	9	6	2	47	3	47.4	7.5
5	4	2	4	1	0	1	2	1	20	10	20.1	25.0
2	0	0	1	1	0	0	1	0	5	0	5.0	0
4	2	1	3	0	2	3	1	0	16	2	16.1	5.0
1	1	0	0	1	1	6	4	0	14	0	14.1	0
1	3	0	2	6	0	0	0	0	12	1	12.1	2.5
0	1	1	0	0	0	2	0	0	4	2	4.0	5.0
5	3	0	0	0	0	3	0	0	12	2	12.1	5.0
9	4	2	0	10	5	2	3	1	38	29	38.3	72.5
0	1	0	2	0	0	0	0	1	4	2	4.0	5.0
0	2	1	2	1	0	2	3	0	11	2	11.1	5.0
0	0	0	1	0	1	1	0	0	3	1	3.0	2.5
4	3	0	7	1	4	1	1	1	22	3	22.2	7.5

## (2) 調査方法

質問紙法を用いて、36図に示すようなカテゴリーから質問項目を決定している。つまり、ガイダンス領域に対応する四領域～訓練学習領域、健康領域、人間関係領域、そして職業、進路領域、さらに、訓練生活に対する全般的な適応感、興味・能力の自己理解、相談機能の必要性、入校動機を併せて調べている。

質問項目の選定は、各カテゴリーごとに不安、悩みなど不快感情を中心としてなるべく日常生活の中にもみられる素朴な表現を用いることとして、各科の指導担当者が項目をもちよって選定している。

調査用紙は、付表7のごとくである。調査対象は、C校1年生140名、うち100名が養成訓練生であり、40名が2類自動車整備科の高卒訓練生である。実施期間は昭和48年12月である。

なお、C校の傾向を位置づけるために、比較群として、47年10月T校1.2年生、178名、49年6月H校1.2年生318名にも類似の調査を実施している。結果集計は、付図6のようなカードを用いて、ソーターで集計した。このカードは今後、個人指導に活用することも意図している。

表35 b 訓練校内の環境(II)

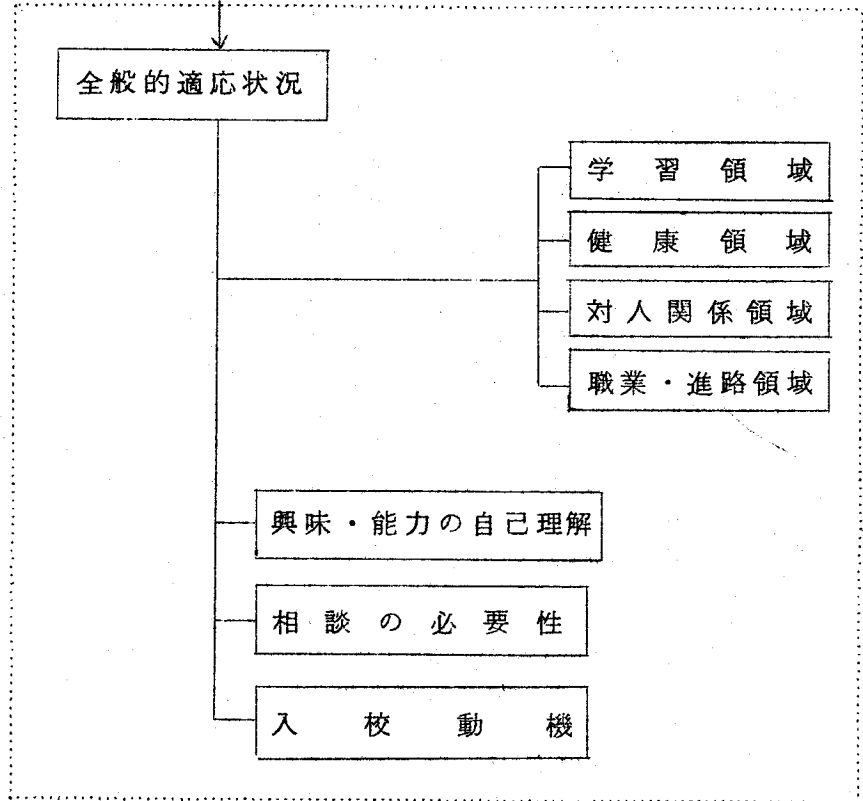
質 問 項 目		反 応 肢
D-1	あなたは実習がじょうずにできなかった日は、どんな気持ですか	ア 家に帰って寝るまでその事が思い出される イ 訓練校を出たとたん、わすれてしまう ウ べつに気にしない
D-2	あなたは、訓練校以外の中学校高等学校あるいはその他で習ったことがあるか	ア いっぱいあった イ すこしあった ウ なにもない
D-3	あなたは訓練校に入る前に、なんの科目を勉強しておいたほうが訓練校に入って役立つと思いますか	ア 体 育 イ 理数科 ウ 国 語 エ 社 会 オ 職 業 カ わからない
D-4	あなたは、いままでに受けた職業訓練で何かあなたの身についたことがありますか	ア あった イ すこしあった ウ けつきよく何も身につかなかった エ 訓練校のことを考えただけでいやになる
D-5	あなたは学科や実習の時間位公平かつ平等に、あつかわれているか	ア みんなよりよく見られている イ みんなと差別してあつかわれている ウ 公平にあつかわれている
D-6	あなたは実習を、どんな気持でつづけていますか	ア 上手にやらないと卒業してから困ると思って イ 先生にほめてほしいから ウ 先生がガミガミおこるから エ 実習の終わったとき、たのしみだから オ この仕事で在学中アルバイトをやってみようと思うから カ べつに考えはなく、みんながやっているから
D-7	あなたは、あらたに習ってみたい職業がありますか	ア 機 械 科 イ フライス科 ウ 板 金 科 エ 溶 接 科 オ タイル施工科 カ ブロック建築科 キ 製版印刷科 ク 塗 装 科 ケ 電気機器科 コ 木 工 科 サ 自動車整備科 シ " (2類) ス そ の 他
D-8	入学してから今日まで退学したいと思ったことがありますか	ア 何回か、うかんだことがある イ 1回うかんだことがある ウ まだ1回も考えたことがない エ 自分だけの考えで、休んだことがある

反 応 実 数										反 応 率		
										中卒者	高卒者	
2	2	0	6	1	0	3	3	1	18	5	18.1	12.5
3	5	2	2	6	5	3	0	0	25	8	25.2	20.0
12	9	5	4	3	8	3	5	2	51	15	51.5	37.5
1	1	4	2	0	0	1	1	1	11	5	11.1	12.5
13	10	3	7	11	8	7	7	1	67	28	67.6	70.0
3	2	0	3	0	4	1	0	1	14	2	14.1	5.0
2	3	2	1	5	0	0	0	1	14	2	14.1	5.0
12	12	5	10	9	4	2	3	0	57	15	57.5	37.5
0	8	3	3	7	3	1	1	1	27	1	27.2	2.5
0	1	2	1	5	3	1	2	0	15	2	15.1	5.0
0	1	1	3	6	4	3	1	1	20	7	20.2	17.4
3	2	1	1	0	5	3	1	0	16	5	16.2	12.5
8	5	4	8	7	10	6	2	33	53	28	53.5	70.0
10	6	2	2	4	2	3	6	0	35	9	35.3	22.5
0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.0	2.5
2	1	1	1	0	0	0	0	0	5	0	5.0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1.0	0
3	4	1	2	4	2	2	5	0	23	2	23.2	5.0
10	10	6	8	7	10	7	2	2	62	26	62.6	65.0
6	4	0	8	7	3	5	3	1	37	14	37.3	35.0
0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1.0	0
0	2	0	0	5	0	0	1	0	8	0	8.0	0
3	3	5	2	4	7	2	3	2	31	6	31.3	15.0
0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1.0	0
5	5	2	1	0	2	0	1	1	17	5	17.1	12.5
2	1	0	0	1	1	0	0	0	5	2	5.0	5.0
1	3	0	2	0	1	0	0	0	7	1	7.0	2.5
1	1	0	2	0	3	0	0	1	8	13	8.0	32.5
0	5	2	1	3	0	0	0	1	12	7	12.0	17.4
0	0	0	1	0	1	2	0	1	5	0	5.0	0
0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1.0	0
0	1	0	1	0	0	0	0	2	4	1	4.0	2.5
0	3	3	2	3	0	1	0	1	13	7	13.1	17.4
0	1	3	2	1	1	2	1	0	11	2	11.1	5.0
2	1	1	0	2	1	0	0	0	7	1	7.0	2.5
3	5	2	0	8	4	1	4	0	27	1	27.2	2.5
2	1	2	1	1	0	0	0	0	7	0	7.0	0
2	1	1	1	1	1	1	0	0	8	6	8.0	15.0
11	6	1	5	2	3	1	3	0	32	12	32.3	30.0
1	2	1	0	1	0	2	2	0	9	5	9.0	12.5
3	3	4	5	4	7	6	0	1	33	14	33.3	35.0
2	2	0	1	9	2	0	4	0	20	7	20.2	17.4

図36 生活意識調査カテゴリー

- a Personal traits
- b 生活意識

- イ. 家庭・訓練校・通学時ごとの心的緊張
- ロ. 訓練校における生活意識(悩み等)
- ハ. 興味, 期待意識





### (3) 調査結果

C校における質問項目全体についての回答は、表37のごとくである。

#### 3-1 生活意識の全般的傾向

##### a. 全般的適応感

全般的な適応感についてみると、訓練校入校の満足感、および訓練校生活の満足感を約60～70%の訓練生が示している。

つまり、表37、図38(a)～(b)にみるごとく、「職業訓練校に入ってよかったと思うか」という問に対して、69%がYESと回答している。

また、「訓練校での生活は楽しいですか」という質問に対して、66%がYESと回答している。この傾向は比較群のT校、H校1年生でもほぼ類似しており、信頼できる傾向と思われるし、現在訓練を受けている当概者としては極めて数的に高いと考えられる。

なお、この傾向を知能偏差値段階との関連でみたのが、図39、図40である。

知能偏差値の低い者、および高い者に満足感が低く、中間段階の知能の群に満足感が高くなっている。

これは常識的にもうなずけることであり、集団教育訓練の欠陥があらわれているといえる。

##### b. 実技・学科に対する満足感

実技訓練の時間に対する満足感は比較的高く、学科時間に対する満足感が低い傾向にある。

つまり、図41にみるように、「実技訓練の時間は楽しいですか」に対して、63%YESと回答し、また、「学科訓練の時間が楽しいですか」に対しては、30%がYESと回答している。

##### c. 訓練校生活への不満感、悩み

訓練校生活への不満感は約50%であり、また悩みがあるかという問に対しては、これも約50%が「あり」と回答している。(表37参照)。

なお、悩み有とする回答の率は、訓練校により差が大きく、C校で49%と最も高く、H校が43.8%、T校は20.0%と低くなっている。

さらに、以上のような中卒1年生の全般的な適応感を高卒2類生と比較すると、図38-(b)の通りで、ほぼ同様の傾向を示しながらも、訓練校生活への満足感が低く、不満および悩みが多い傾向を示している。

これは、年令的な発達傾向の差違ともとれるが、訓練環境の不備が訓練校生活の満足感に関連していると思われる。

表37 全般的適応状況

(数字は%)

質問項目	C総訓 (48.12)		T総訓 (47.10)			H総訓 (49.6)		
	中卒1年生	高卒1年生	中卒1年生	中卒2年生	高卒1年生	中卒1年生	中卒2年生	高卒1年生
	N=100	N=40	N=80	N=88	N=10	N=162	N=146	N=10
1 職業訓練校に入ってよかったと思うか	69.0	52.5	75.0	96.5	100.0	66.7	57.5	50.0
2 現在訓練校での生活は楽しいですか	66.0	52.5	55.0	72.7	20.0	56.8	30.1	10.0
3 実技訓練の時間が楽しいですか	63.0	62.5	81.2	80.6	60.0	74.7	61.6	80.0
4 学科訓練の時間が楽しいですか	30.0	15.0	15.0	23.8	10.0	13.6	14.4	30.0
5 現在訓練校での生活に不満があるか	51.0	55.0	43.7	61.3	70.0	55.6	76.0	70.0
6 悩みごとがありますか	49.0	55.0	20.0	47.7	40.0	43.8	53.4	90.0

図 3 8—(a) 中卒 1 年生の適応状況

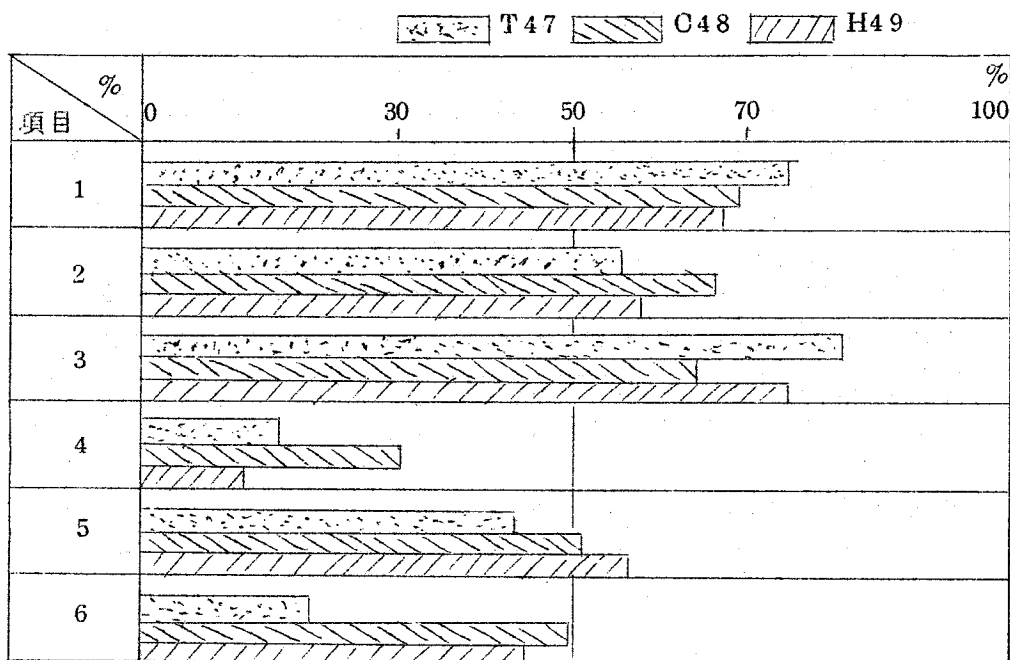


図 3 8—(b) 高卒 1 年生 ( 2 類 ) の適応状況

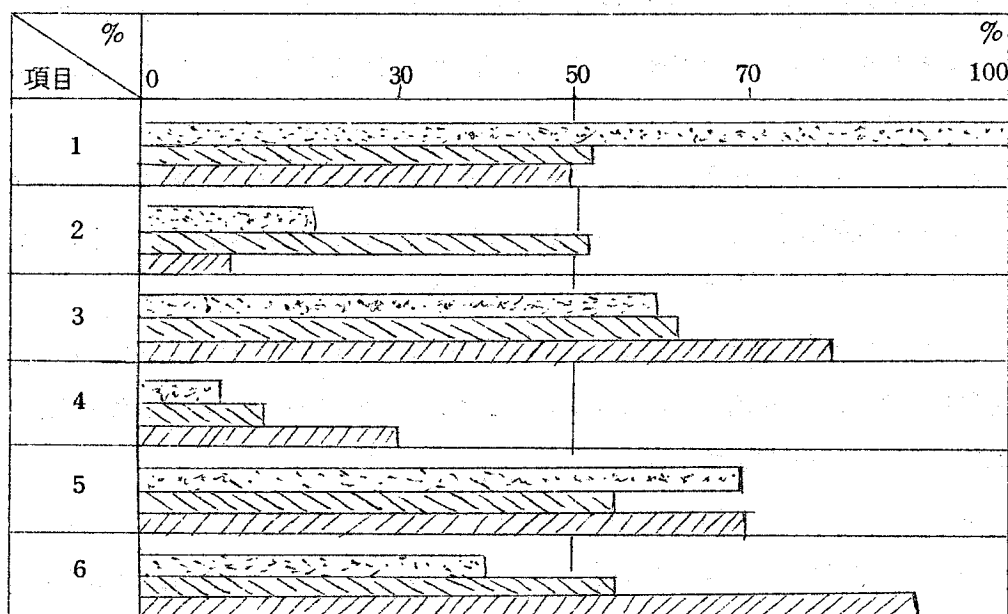


図 3 9 入校満足 Y E S と知能との関連

知能段階	34 以下	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60 以上
調査数	8	10	19	28	20	10	3
Y E S 数	5	6	14	21	13	8	1
Y E S %	62.5	60.0	73.7	75.0	65.0	80.0	33.3

図 4 0 訓練校生活満足 Y E S と知能との関連

知能段階	34 以下	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60 以上
調査数	8	10	17	27	18	11	3
Y E S 数	4	5	13	20	11	10	0
Y E S %	50.0	50.0	76.5	74.1	59.9	90.9	0

d. 訓練校生活の悩み、不満の領域

訓練生の悩みや不満がどのような領域にあらわれているかをみたのが、図 4 1 である。

おおまかにみると、学習領域の学科面、および職業、進路領域の資格問題に反応率が高く、訓練生は学科の学習、将来の資格に悩み、問題を強く感じていることがはっきりとわかる。

つまり、学科面での質問項目、「成績の悪い学科があつてこまっている」65.0%、「学科の時間に、ほかのことを考えていることが多い」57.0%、「学科のとき先生の説明がよくわからない」62.0%となっている。

また、職業、進路領域の資格問題についてみると、「訓練校で高校資格のとれることをのぞむ」74.0%、「もっと国家資格や免許をはっきりしてほしい」59.0%が高い反応率を示している。

このような二つの傾向は比較群の H 校でも、ほぼ同様である。

つまり、技術者、技能者の道をとにかく選択し、訓練校に入ってよかったと思っているが、学科学習の場面では問題があり、将来については非常に心配しているといえる。特に国家資格や免許の位置づけを強く望んでいると概括できる。

さらに、領域別に、特長的な傾向をひろってみると、次のようになる。

(1) 基礎学習技術面では、「じょうずな勉強のしかたがわからない」53.0%、「教科書の字が読めなくてこまっている」53.0%、「簡単な計算に手まどることが多くてこまっている」28.0%

である。

Reading, Computationなど基礎的な学習技術に悩みがある者が約3割いることは専門的技術習得をめざす訓練校としては注目すべき事実である。

(ロ) クラブ活動については、「参加したいクラブ活動がなくてつまらない」43.0%で、比較的反応が高くなっている。

(ハ) 「規律やしつけがやかましくていやだ」とする者が39.0%であり、現代の若者が規律、しつけをきらっている一面がうかがわれる。

(ニ) 健康領域では全体として反能率は低いながらも、「カゼを引きやすい」「からだの調子がわるい」ことを訴える訓練生が約3割もいることは、精神的な不安定が身体的な面にあらわれているともみれないだろうか。

(ホ) 人間関係領域では、友人関係よりも教師との関係に悩み、不満を持つ者が多いことがみられるが、青年期としては当然の結果でもあろう。

(ヘ) 職業、進路領域では、「このまま技能者として成功できるか心配である」63.0%で高く、「高校に進学すべきだったと思っている」36.0%、「どこに就職すればよいのかわからないでまっている」32.0%がやや高くなっており、進路指導面での配慮が必要となる。

なお、本調査前には反応率が高いであろうと予測していた項目「第一希望の科に入れなかったことをくやんでいる」は9.0%で比較的悩んでいる者は少ない傾向をしめしている。つまり、1年生12月頃には、希望と現実的関心を調和させる者が多いと考えられる。

以上が、ガイダンス領域ごとに見た、悩み、不満の訓練生全般の傾向である。

#### f. 興味、能力変容の自己理解

第1学年の12月時点において、訓練内容に対する興味が上昇していると回答している者が59.0%である。

このように多くの訓練生は訓練進行にともなって、主観的には学習問題の進行にともなって自己の興味が上昇していることを数が示しているし、これに対応して自己理解を示している。(図42)

一方、能力についてみると、「実技成績はだんだんよくなっているか」52.0%、「学科成績はだんだんよくなっているか」32.0%と実技に対しては上昇感を持つ者が多いが、学科に対する上昇感をもつ者は少ない。

また、訓練内容に対する興味一致に関する反応は52.0%、能力一致に関する反応は50.0%である。

図 4 1 領域別項目ごとのYES%

□ C1年生    ▨ H1年生

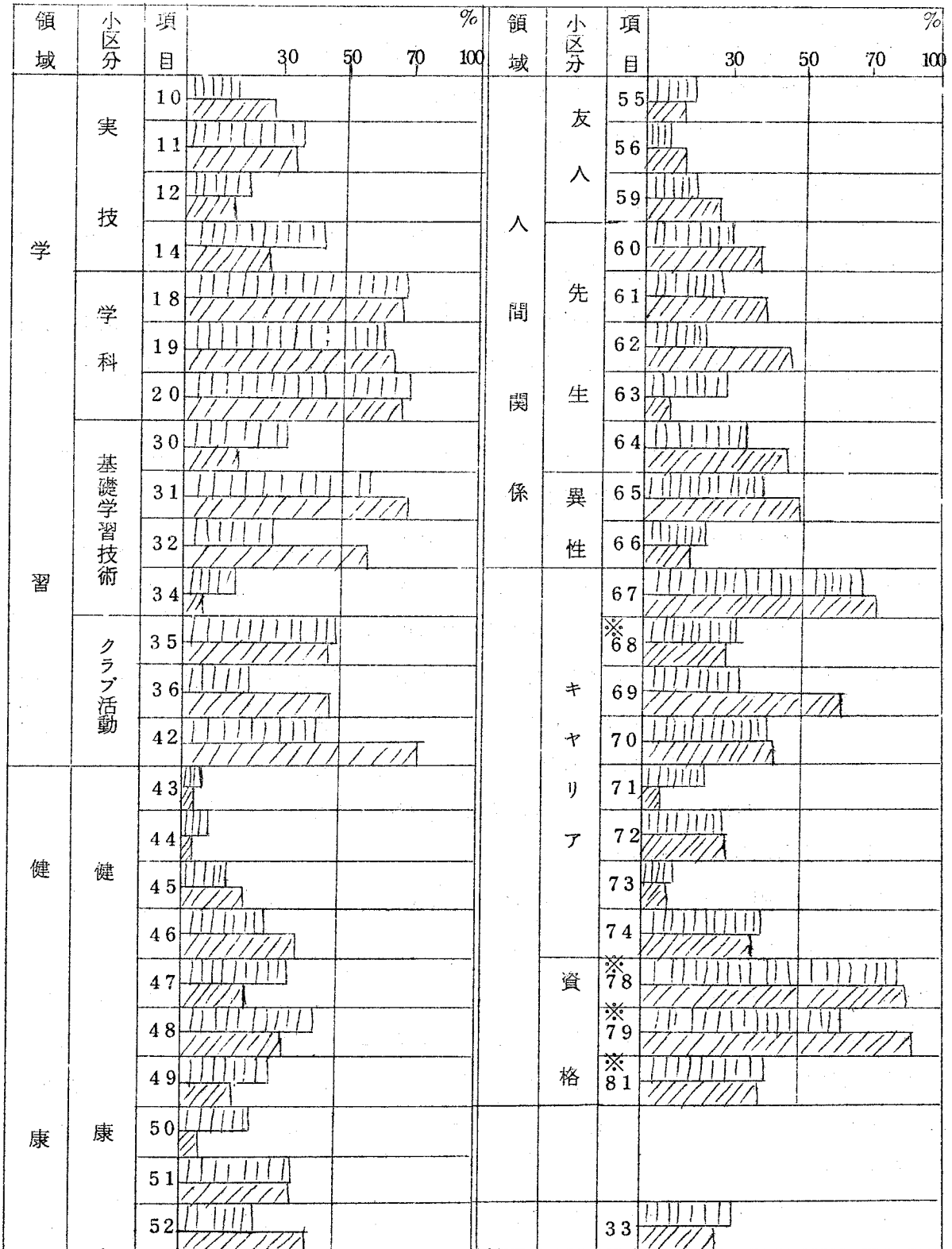


表4.2 興味、能力の自己理解 ( % )

質問項目	調査実施校											
	C 総 訓					H 総 訓					T 総 訓	
	中卒1年生 N=100	高卒1年生 N=40	中卒1年生 N=162	中卒2年生 N=146	高卒1年生 N=10	中卒1年生 N=20	中卒2年生 N=88	高卒1年生 N=10	中卒1年生 N=20	中卒2年生 N=88	高卒1年生 N=10	
87	52.0	62.5	60.5	48.6	70.0	75.0	73.8	80.0	75.0	73.8	80.0	
88	50.0	37.5	56.2	54.1	30.0	58.7	62.5	20.0	58.7	62.5	20.0	
89	52.0	37.5	54.3	41.8	30.0	41.2	28.4	10.0	41.2	28.4	10.0	
90	32.0	17.5	19.1	21.2	30.0	17.5	20.4	10.0	17.5	20.4	10.0	
91	21.0	7.5	22.2	24.0	0	31.2	32.9	10.0	31.2	32.9	10.0	
92	21.0	7.5	14.2	22.6	0	26.2	23.8	10.0	26.2	23.8	10.0	
93	59.0	55.5	48.8	37.7	50.0	65.0	69.3	90.0	65.0	69.3	90.0	
94	16.0	15.0	40.1	38.4	10.0	18.7	20.4	10.0	18.7	20.4	10.0	
97	—	—	16.7	37.0	10.0	—	—	—	—	—	—	
98	—	—	43.8	48.6	10.0	—	—	—	—	—	—	

表43 相談機能の必要性

(%)

質問項目		調査実施校		H 総 訓		
		調査対象		C 総 訓		高卒1年生
		中卒1年生	高卒1年生	中卒1年生	中卒2年生	
		N=100	N=40	N=162	N=146	N=10
81	だれかに相談してみたいことがありますか	31.0	30.0	18.5	34.9	20.0
82	悩みを相談する人がほしいですか	52.0	35.0	40.1	53.4	50.0
83	相談する部屋が訓練校にあったほうがよいですか	30.0	27.5	17.3	21.2	60.0
84	担任の先生に相談したいことがありますか	—	—	0.5	0.7	0
85	父母に相談したいことがあるが相談になってくれない	—	—	5.6	0.8	0
86	同輩、友人に相談して判断の基準とする	—	—	39.5	51.4	80.0

g. 相談機能の必要性

訓練生の悩み、問題の解決に対する一つの機能として、カウンセリングなど、他者との相談が有力な手段と考えられている。

それに対して、訓練生は相談ということをもどのように考えているのだろうか。

表43、図44にみるように、約3割の訓練生はなんらかの意味で相談機能の必要性を認めている。

つまり、「だれかに相談してみたいことがありますか」に対して31.0%がYESと回答し、「悩みを相談する人がほしいですか」に対して52.0%がYESとし、さらに、「相談する部屋が訓練校にあった方がよいですか」に対して30.0%がYESと回答している。

この傾向は高卒訓練生についても同様である。(第44(b)図参照)



図 4 4 - (a) 中卒 1 年生の相談機能の必要感

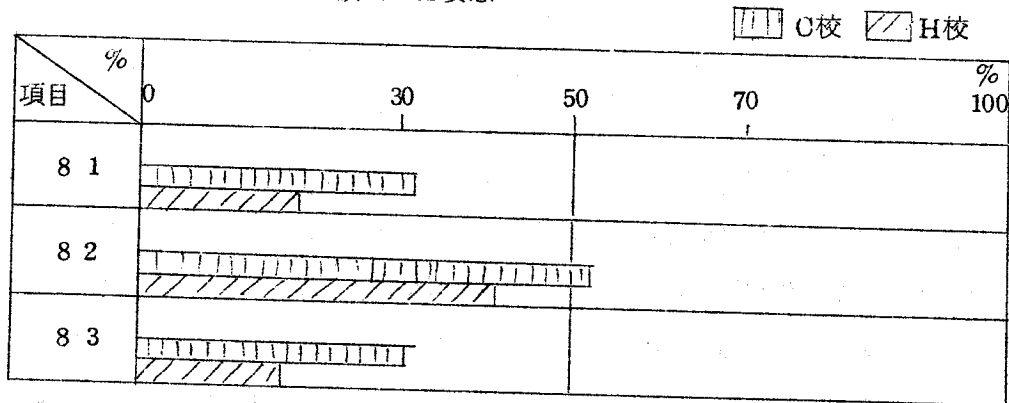
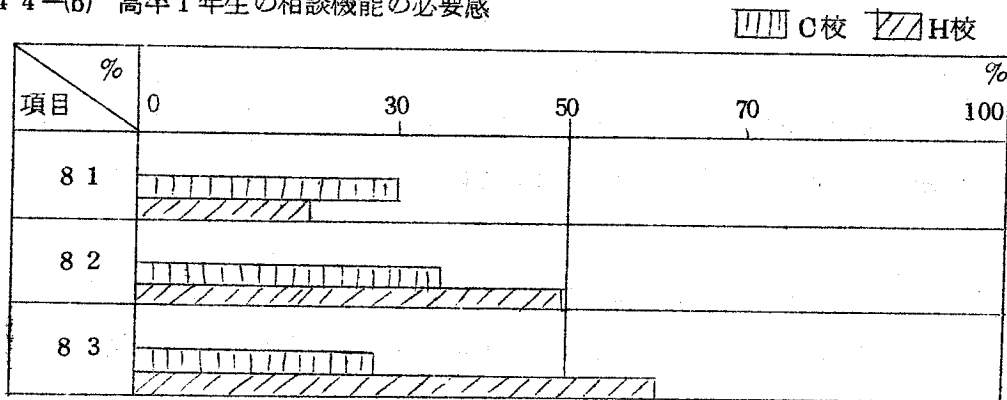


図 4 4 - (b) 高卒 1 年生の相談機能の必要感



#### h. 入校動機

入校動機が中退に関連することは前章の事例でも明らかになった。

入校動機は大別して、自立的選択と他立的選択とがあろう。Evanceによれば、前者は<by choice>としての選択であり、後者は<by chance>という考え方による選択である。言うまでもなく、他律的、あるいは消極的な選択が中退に結びつきやすいと思われる。

現在、訓練生がどのような入校動機を示しているかを、みたのが表 4 5、図 4 6 である。

全般的には、「技能者、技術者になりたいから」、「希望している資格が得られるから」、「よい条件で就職できると思うから」という自立的選択を示しながら、ある面で「ほかに行くところがないから」、「他人から進められたから」、「なんとなく入学した」などの項目に対する反応も多い。これは、自立的選択をした訓練生群と他律的、消極的選択をした訓練生群があるともいえるが、むしろ訓練生個人の内的意識をして、自立的側面と他律的側面が混在して選択がおこなわれていると解釈した方が適切であろう。

#### (4) 結果の概括

a) 調査前に予測していたよりも、多くの訓練生が“訓練校に入校してよかった”、“訓練生活が楽しい”という意識をもっている。

また、訓練内容に対する興味が高くなっている者が多いのは注目に値する。

それは、実技訓練による生活満足であり、心的背景としては“何かが身につく”ことの実感にあると思われる。また、個別学習指導に近い教え方がとられているので、“先生が中学校と違ってわかるまで教えてくれる”という点から満足感が生じているといえよう。

b) また反面、訓練生の約3割が訓練校入校、または訓練校生活に対して満足していないことも事実である。

その満足していない側面はつぎの通りである。

① 学科についての悩みを持っている訓練生が多い。学科の重要性は認識しているものの、中学校時代からの勉強きらい意識があり、基礎学力の不足も手つだつて、学科内容に対する悩みをもっている。

② クラブ活動が少ないことへの不満は表面的にはあまり強くないが、前章における中退者フォローアップの結果を併わせて考えてみると、青少年期にはスポーツ、文化活動的要素を職業訓練が持つことをのぞんでいる。

③ キャリアの問題として、“技術者、技能者の道をとにかく選び、入校しているが、“将来については非常に心配している”。

特に、“技術者の社会的地位”“国家資格や免許を強く望んでいる”。

④ 中卒訓練生と高卒訓練生とでは生活意識がはっきり分かれている”

特に、訓練校進路の選択においては高卒者は自立的選択をしている。この自立的選択が訓練内容に対する興味をおこす結果になっていると思われる。

ゆえに、中卒訓練の場合、訓練校進路選択を再度自己の選択としてとらえなおす指導が必要となっている。

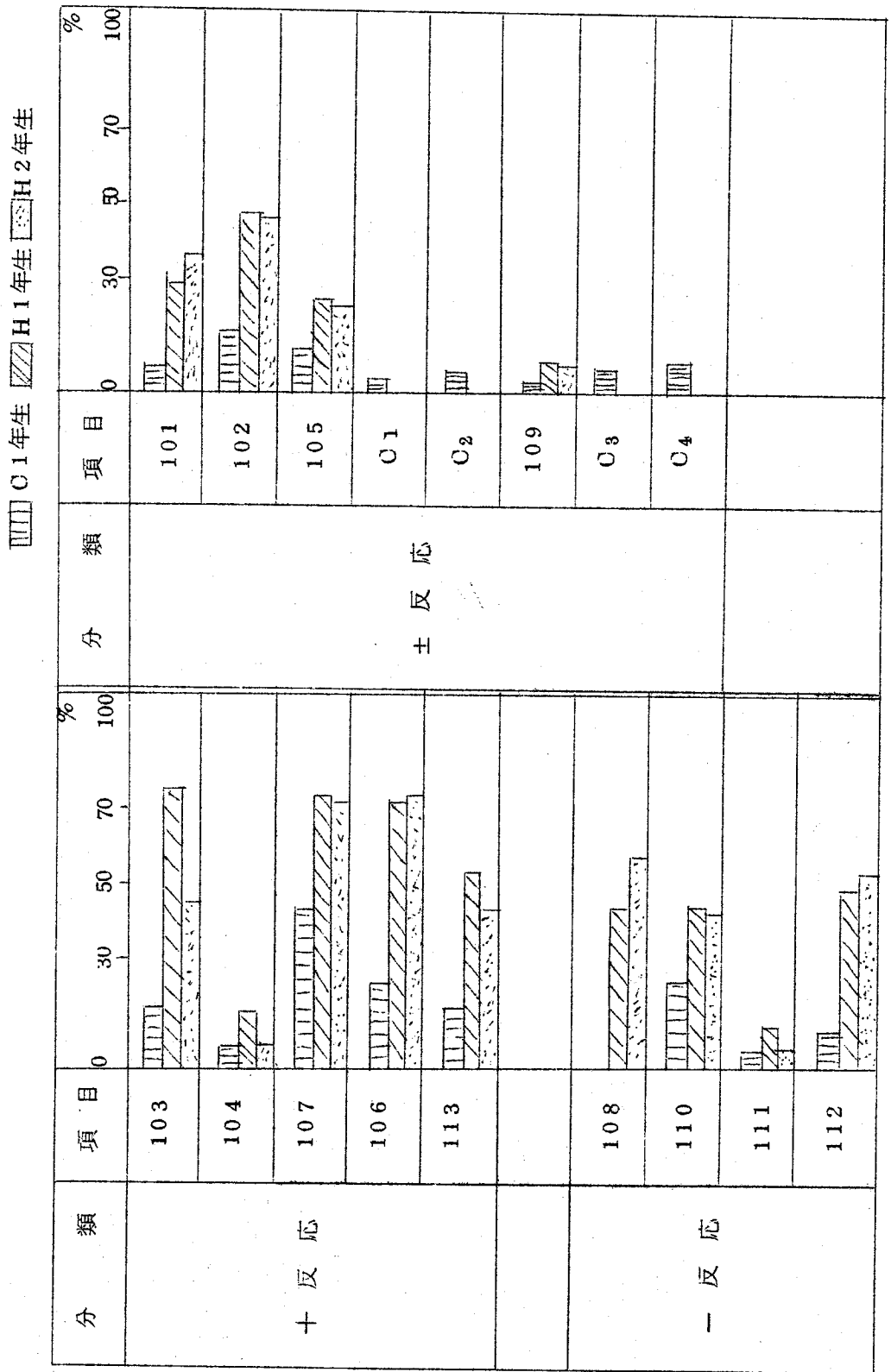
このような訓練校生活での不満意識が直接中退意識に結びつくとは考えられないが、中退意識を高める一要素となっていることは確かであろう。

(%)

図45 訓練入校動機 (重複選択式)

質問項目	調査実施校と実施時間					
	C総訓(48, 12)			H総訓(49, 6)		
	中卒1年生 N=99	高卒1年生 N=40	中卒1年生 N=162	中卒2年生 N=146	高卒1年生 N=10	
101	7.1	12.5	29.0	37.7	80.0	
102	17.2	10.0	48.8	48.6	30.0	
103	18.2	47.5	72.8	44.5	30.0	
104	7.1	2.5	16.7	7.0	0	
105	11.1	2.5	26.5	23.9	20.0	
C1	3.1	5.0	-	-	-	
C2	6.2	10.0	-	-	-	
106	23.2	35.0	71.0	72.6	80.0	
107	41.0	45.0	71.0	70.5	90.0	
108H	-	-	42.0	58.2	40.0	
C3	5.1	0	-	-	-	
C4	8.1	-	-	-	-	
109	1.0	0	8.0	3.0	0	
100	25.3	10.0	44.4	42.5	20.0	
111	4.1	2.5	12.9	5.0	0	
112	11.1	0	49.4	52.1	80.0	
113	17.2	20.0	51.9	41.8	30.0	

図46 中卒訓練生の入校動機比較



## 6. 訓練生の生活意識をもとにしたカンセリングについての考察

### (1) 訓練生理解とガイダンス

中退現象は種々の原因によって生じているので、単にガイダンス手段ですべての中退が減少するのは考えられない。しかしながら、ある種の中退を防止することが可能であろう。この「ある種の中退」とは何であろうか、をガイダンスの一手段としてのカウンセリングとの関連でさぐってみたい。

従来、中退者、離職者は社会環境に対する不適応であり、問題なのだと考えられていた。この考え方は、「教育や臨床心理学のオーソドックスな判断とされてきた。」そして、不適応者の指導や治療のために、学校は相談員をもうけ、その専門家の成長に力をいれてきたのである。

しかし、少なくとも教育部門における不適応者の問題解決には、固定した環境になじませる型の適応指導よりも、自己実現指導の必要性が指摘されるようになった。

同様に、職業訓練においても、限定された人間、例えば心的病人を対象とする画一的な不適応対策が適切なものとは考えられなくなった。

確かに、訓練生活において、不安、不満が生じている。しかし、訓練生は病人ではないのである。そこに、消極的な中退対策より、積極的な中退対策を考える必要が生れてきたように思われる。

その積極的な中退対策は、訓練生の真の理解に基盤をおかねばならない。

Combs・&・Snyggが指摘するように、<sup>28)</sup>訓練生を理解するには、「人びとをかれらが外部の人びとに見えるがままに観察するのではなくて、かれらがかれら自身に見えるがままに観察することから始まらねばならない、と考える。これが、訓練生の立場に立って職業訓練を実践することに結びつくであろう。

訓練生の生活満足はかれらが見た職業訓練での満足であり、訓練を受けた者以外の推測した満足とは違うのである。訓練環境の改善は訓練を受けた者の満足、「訓練を受けてよかった」という意識をもとに実施されることが必要であろう。

従来、公共職業訓練においては、訓練生の意識は問題にされていなかった。それは職業訓練の一つの体質となつているとも考えられる。

その状況に、個を重視するガイダンスの考え方を導入することは、ある意味でむりともいえる。しかし、公共職業訓練において、現実にヒューマンイズムの精神が存在しているとき、かならずしもガイダンスの一手段としてのカウンセリングを職業訓練に導入するのは無理とも言い切れない。

本研究においても、われわれの休憩室を訓練生のカンセリング室に転用したのも、そのささいなあらわれであろう。

ところで、ガイダンスの特色は、“危機”との関連で生活指導を定義づけている。そこには、人間の生活はたえず、危機に直面する可能性にみちているという考えが前提されている。

つまり、Jonesの定義をかりれば、“ガイダンスとは、個人が生活の危機的場面において、賢明な選択、解釈、適応ができるように助言、助力を与えることであり、しかもそれによって自己指導の能力がたえず成長するように与えることである。”<sup>29)</sup>

このようなガイダンスの一手段としてのカウンセリングの目的は、次のようになる。<sup>30)</sup>

- 1) 個性を全面的に、最大限に発達させること
- 2) 個人が自己の発達にたいして責任をとるようにさせること
- 3) 他の個人と、正常なたのしい関係をもつことができるように援助すること
- 4) 情緒的発達と関連のあることであるが、個人が“気持ちがよくなる”ように援助すること
- 5) 個人がその適応上の問題をじぶんでよりよく解決できるように援助すること

である。

また、カウンセリングの前提条件として、①独自の個性に注目すること、②個人の発達は、内的な力と外的な環境とのあいだのバランスを求めらるものであること、③人は、目的であつて、手段ではないということ、などがあげられている。

以上のような、カウンセリングの前提条件が、わが国の職業訓練の中に存在するかいなかは別として、青少年期の職業訓練の一角をになう、われわれにとって、一応の吟味をするに値するものと考えられる。

## (2) カウンセリングと訓練生の客観的理解

カウンセリングを実践する準備段階として、教師による主観的理解に加えて、なんらかの客観的理解が必要となる。<sup>31)</sup>

この客観的理解の手段として、本年第2節の個性検査による訓練生理解、および第3節で述べた訓練生の心理空間、生活空間の認知としての生活意識の理解があげられる。

この両者とも、カウンセリング目的としては、訓練生個々の情報として、担当教師の手もとに準備すべきものと考えている。

一般に、主観的な理解では“どうも訓練が理解できない”“つかめない”という現実の声をうめるものである。

以上のように、まず訓練生を客観的にも理解することから、カウンセリングの第一歩がはじまる。

## (3) 訓練生のカウンセリングへの期待

本章第3節(g)にみられたように、訓練生の約3割がなんらかの意味で、相談機能の必要性を認め

ていることは注目に値する。

これがそのままカウンセリング室の運営開始を示唆するものとは言えないが、今後、組織的にカウンセリングを実践する体制を準備することは必要であろう。<sup>32)</sup>

この準備にあたって、訓練生は次のようなカウンセリングをのぞんでいる、

①“ 行動の基準として、他の人の考え方を知りたい ”

②“ 教師になにか指導してもらいたいというよりも、友人間の話し合いがうまくいくように援助してほしい。 ”

このような訓練生の声を軸にして、職業訓練の指導体制にカウンセリングが位置づけられることが必要である。

(4) カウンセリングが中退をなくす唯一の手段ではないこと

すでに、繰り返し述べたごとく、中退の原因は多岐であり、また、社会制度の改善以外に解決の道のない問題もある。

例えば、キャリアに関する問題の中で、社会における技能者の地位が低いこと、あるいは、技能労働者の生活手段に対する低い評価に対することに原因がある中退をどのように指導したらよいのであろうか。

われわれは、工業領域における後継者を育成することに一つの目標がある。その工業を中心とする職場に、仕事をする喜びをみいだすことができないとすれば、他の産業の場面に移っていくことを少なくともとめることはできない。

訓練校におけるカウンセリングは、学科、実技など教科指導、および生活指導において問題となる事項を訓練生個人に即して、再吟味して、職業訓練の環境改善と平行して実践されないかぎり、その実効はないと言えよう。

引用文献

- 19) 森 和 夫 : 職業訓練生の生活意識調査  
(日本産業教育学会紀要 1971)
- 20) 戸田勝也 : 訓練生を生かす実技訓練への提案  
(技能と技術 2号 1968)
- 21) 総理府青少年局 1968  
高校生生活意識調査  
(進路指導 11月号)
- 22) 大西誠一郎他 1965, 1966  
学校生活への青少年の適応の問題  
(名古屋大学教育学部紀要)
- 23) 東京都立教育研究所 1970  
高等学校生徒の学校生活に対する適応の実態とその指導  
(同報告書)
- 24) 橋爪 一男 1972  
高校生活への適応の指導  
(進路指導 4月号)
- 25) 増田 幸一 1968  
女子学生のもつ問題, 悩みの調査  
(現代心理学論文集, 明星大研究室)
- 26) 仁藤 友雄 1968  
工業高校生の意識調査  
(進路指導 3月号)
- 27) 戸田 勝也 職業訓練と進路指導  
(職業訓練 1974, 9)
- 28) Combs & Snygg : 人間の行動  
(岩波学術出版, 1971)
- 29) Jones, A. J — 井坂 訳 1968  
生活指導の原理 (誠信書房)  
(Principles of Guidance, 1963)